

3 鳥 類

哺乳類

鳥 類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝 類

甲殻類

その他動物

1. 三重県の鳥類相

鳥類は比較的人目に付きやすく、関心を持つ人が多く、他の分類群の生物に比べ県内の生息状況はよく把握できていると考えられる。

現在までに三重県で確認されている鳥類は301種類である。この内、58種類はいわゆる迷鳥で、三重県で継続的に繁殖または越冬している種類と、渡りの中継地として継続的に利用している種類は、合わせて243種類である。

このうち留鳥はクマタカ、オオタカはじめ79種類32.5%、夏鳥はサシバ、ハチクマはじめ37種類15.2%、冬鳥はハイイロチュウヒはじめ79種類32.5%、旅鳥はホウロクシギはじめ48種類19.8%である。冬鳥と旅鳥を合わせると127種類52.3%と半分を越え、本県は鳥類の繁殖地としてはもちろん、越冬地、中継地としても重要であることがわかる。

三重県は南北に細長く、森林については、鈴鹿山脈や台高山脈のブナ林、トウヒ林などの亜高山帯、山地帯から、里山、海岸林と多様性に富み、地形も、山地、丘陵地、平野、海岸と多様で、特に海岸は、干潟から砂浜、磯、島嶼群など多様性に富んでいる。このため鳥類相も多様性に富んでいる。

鈴鹿山脈、布引山地、高見山地の山頂付近はブナ林、台高山脈の山頂付近はブナ林やトウヒ林がわずかに残されており、コルリ、コマドリ、ビンズイなど亜高山帯特有の野鳥が繁殖し、イヌワシ、クマタカなど急峻な山岳地帯を主な生息地とする猛禽類が生息している。これら脊梁山地に連なる低山帯はスギ・ヒノキ人工林が多いが、アカマツ林、雑木林、照葉樹林が所々に残されており、オオタカ、ハチクマなどの猛禽類が繁殖している。特に南勢地方には広大な照葉樹林が残されており、ヤイロチョウ、アカショウビン、サンコウチョウなど希少な鳥類が繁殖している。また、丘陵地帯はアカマツ林や雑木林が多く、ホオジロ、ウグイスが優占しているところが多く、サシバなどの猛禽類が生息している。伊勢平野、伊賀盆地などの平地は、農耕地が多いが河畔林や比較的広い河原が残された河川には、猛禽類やイカルチドリ、イソシギなどが繁殖している。また、キアシシギ、アカアシシギなどのシギ・チドリ類の渡来地ともなっており、クサシギ、タシギなど多くの冬鳥が越冬している。海岸は、伊勢湾岸は砂浜が大部分で、比較的広い砂浜が残されている四日市市の吉崎海岸や津市の白塚海岸、田中川、安濃川河口付近などは、シロチドリ、コチドリなどの繁殖地となっており、ハマシギやミユビシギなどの渡来地や越冬地となっている。朝明川や櫛田川などの伊勢湾にそそぐ各河川の河口や鳥羽市の池の浦湾、英虞湾、紀北町の矢口浦、尾鷲湾など大きく入り組んだ入り江の奥には砂泥質の干潟が発達しており、ホウロクシギなど多くのシギ・チドリ類の渡来地となっている。志摩半島から東紀州にかけては、磯浜や島嶼が多く、カンムリウミスズメ、ウチヤマセンニュウ、カラスバトなど特有の鳥類が生息している。広大な砂利浜である熊野市から熊野川河口までの七里御浜は海岸浸食が著しく浜が痩せ、生息している鳥類は少ない。

2. すでに絶滅した種類

古事記、日本書紀には、日本武尊が能褒野^{のぼの}（現在の亀山市）で死去し、白鳥となって大和の方向に飛び去ったと書かれている。ハクチョウ類は、古代には近畿一円で普通に見られていたようである。また、ガン類、ツル類、コウノトリ、トキも絵画などに良く描かれており、江戸時代まではごく普通に生息していたようである。

江戸時代には、特に白子（現在の鈴鹿市）、松阪（現在の松阪市）など紀州藩の飛び地であったところは、鷹狩りに使うオオタカやクマタカが巢をかけたなら必ず奉行所に届け出、名主が責任を持たされるなど厳重に保護され、ツル類も冬期に多数渡来し、渡来中は専属の侍が餌を与え、人の立入を厳重に禁止していた。また、近隣では火を焚いたり、発砲することももちろん、歌舞音曲など大きな音を出すことも厳禁し、藤堂藩、神戸藩（現在の鈴鹿市）、桑名藩など近隣の他藩にまでその禁令は及び、餌となる魚介類の採集を厳禁するなど、厳重に保護されていた。そのため、マガン、オオヒシクイなどのガン類も多かったようである。現在では、タカ類は激減し、コクガン以外のガン類も数年に1度程度まれに渡来するのみとなっており、すでに絶滅したといえる。ツル類については2008年より少数が渡来するようになった。世界的な保護対策によりやや回復傾向にあるためである。また、ハクチョウ類は数年に一度少数のコハクチョウが迷行するのみとなっている。

3. 調査の内容

2005年度の初版時には、日本野鳥の会三重県支部の会員により繁殖期と越冬期のラインセンサス調査を実施するとともに、これまでの観察情報を集めて整理し、また、過去の文献を精査した。また、データが不足していた離島や海上、山岳地帯の鳥類については、特に調査を実施した。それらを総合的に判断し、レッドリスト記載種を選定した。改訂にあたっては、更に調査を追加し、寄せられた記録を精査した。

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
EW
EW
CR
EN
VU
NT
DD

4. レッドリスト記載種選定

選定にあたって、数年に一度程度しか観察されない種は県内を継続的には利用していないものと考えて、希少なものであっても対象から除外し、ほぼ毎年観察され、三重県で継続的に繁殖または越冬している種、または、三重県を渡りの中継地として継続的に利用している種を選定の対象に挙げ、それらの生息状況をチェックシートで確認してランクを決定した。

その結果、2005年度には74種類（三重県で確認された鳥類の31%）がレッドリストに挙げられ、2014年度にはこの10年間に記録がなかったり、危機的状況ではなくなったと考えられた12種を除外し、新たに危機的であると判明したクロツラヘラサギなど7種を追加し、69種が挙げられた。絶滅危惧ⅠA類はカンムリウミスズメ、イヌワシはじめ14種類（20%）、絶滅危惧ⅠB類はコアジサシ、ハチクマはじめ9種類（13%）、絶滅危惧Ⅱ類はコクガン、チュウサギはじめ21種類（30%）、準絶滅危惧はハイタカ、フクロウはじめ18種類（26%）、情報不足はウズラ、ブッポウソウはじめ7種類（10%）である。なお、チュウヒ、オシドリなど繁殖期と越冬期で個体数が著しく変わる種類については、特にそれぞれの時期でランクを判断した。

5. 記載種の概要

今回レッドデータブック掲載種のうち、猛禽類はオオタカ、クマタカはじめ19種類（掲載種の中の28%）である。三重県で記録された猛禽類は27種であるが、今回の掲載種はその70%にあたり、この仲間の大部分が危機的状況にあることがわかる。猛禽類は食物連鎖の頂点に位置しているため、やはり自然環境の悪化を象徴的に示しているといえよう。

環境別に見ると、干潟や砂浜、河原などに生息している種類は、シロチドリ、コアジサシはじめ14種類（掲載種の20%）、森林に生息している種類はヤイロチョウ、アカショウビンはじめ26種類（38%）、主に淡水域に生息している水鳥は、オシドリ、ヒクイナはじめ10種類（14%）、アシ原を主な生息場所としている種類はチュウヒ、ハイイロチュウヒはじめ4種類（6%）、海域を生息地としている種類はカンムリウミスズメ、ミサゴはじめ5種類（7%）、離島にのみ生息している種類は、カラスバトとウチヤマセンニュウなど3種類（4%）、草原や灌木林を主な生息地としている種類は6種類（9%）である。

県内で確認されている森林性の種類は65種であるが、半数近い26種がレッドリストに挙げられており、開発やスギ・ヒノキ植林地の増加と放棄による森林の自然環境の悪化の深刻さをよく示している。また、県内で確認されている水鳥は165種であるが、そのうちの33種、レッドリスト種のうち48%が水鳥である。特に、干潟や砂浜、河原といった裸地に生息する種類の減少が問題である。これはダムや井堰による河川の土砂流下阻害による広い河原の消滅、海岸浸食の増加による自然環境の悪化を象徴的に示しているといえよう。県内で特に希少となっている自然環境は、こうした河原や砂浜など、広い面積の裸地であり、こうした環境にのみ営巣するコアジサシ、シロチドリ、イカルチドリ、コチドリなどが危機的状況にあると言える。こうした種類は木曾岬干拓地、四日市港などの埋立工事中の埋立地や、造成工事中の造成地などの裸地にも営巣し、一時的に増えることがあるが、こうした環境は工事中に一時的に出来たものであり、一時的に増えたからと言って、危機的状況を脱したことはない。

6. 保護対策

食物連鎖の頂点にある猛禽類を保護することは生態系そのものを守ることであり、そのためには多様性のある自然環境を取り戻すことである。また、大幅に減少した干潟や広い面積のアシ原の復元が必要である。すでに、木曾岬干拓地では、1973年の干陸以来36年にわたり放棄されたので極めて良好な自然が回復し、チュウヒが3つがい繁殖するという全国有数の良好な自然が復元されており、自然復元のたいへん良い例となっている。

農耕地における動植物の激減、特にメダカ、タニシ、ドジョウに象徴される水生生物の激減の影響は深刻で、トキが絶滅し、コウノトリが絶滅の危機にあるのもこのためである。同様にサギ類もレッドリストに5種が記載され、県内で確認されている迷鳥以外のサギ類10種のうちの半数となっている。これらの種類の生息環境を改善するには2003年より農林水産省が進めている「環境保全を重視する農林水産業への移行」政策に基づく農地の改良を早く県内全域に実施することが必要である。従来の圃場整備などの農地改良事業は水路をパイプやコンクリート三面張りにして、水田と排水路も80 cm以上の落差を義務づけ、生物の行き来を大きく阻害していた。これらの反省の上に立ったこの政策では、水路は土や石のものとし、水田と水路や河川との魚介類の行き来を容易にし、特に希少な動植物の生息環境は保護し、農道工事も自然の豊かな場所は避けようと言う事業である。水田を冬期に湛水化する等の施策も必要である。

また、河川については、1990年から近自然工法（多自然型河川工法）が行われるようになってきているが、まだまだ自然の復元にはほど遠いものが多く、一層の努力が求められる。

森林については1951年の森林法改正により、当時の木材不足解消のため拡大造林政策という、全国の森林をスギ、ヒノキ、カラマツの人工林に変える政策が大規模に補助金を伴って行われ、三重県でも急速にス

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ギ・ヒノキ植林地への転換が進んだ。しかし、その後1961年に木材の輸入が自由化された。林野庁は1947年には木材需要の好況のため独立採算性となっていたが、1970年には赤字に転落した。これに象徴されるように、国産材は売れなくなり、木材不況となり、植林したものの放棄される人工林が増え、間伐や枝打ちがされず、モヤシ林、線香林と言われる状態になり現在に至っている。このような放棄された人工林は下生えも生育せず、従って、昆虫も野鳥もほとんど生息できない森林が大部分になった。これは国土保全の上からも早急な改善が必要である。

今後、このレッドデータブックを基に希少鳥類の保護を進め、これ以上リストに上る種類が増えないように努力し、また、危機的状況にある種類を1種類でも減らしていきたいものである。

なお、標準和名、学名及び種の配列については日本鳥学会（2012,2014年追加改訂）により、種の概要や国内外における分布の記載にあたっては清棲(1978)、中村(1995)、高野（1982・1982）などを参考にした。また、県内分布については日本野鳥の会三重「しろちどり」なども参照した。

文 献

- 出口 明. 1958. 秋の伊賀路に想う (伊賀動物地名考). 市民, 1(3): 23-25.
- 遠藤公男. 1994. 盛岡藩御狩り日記. 講談社, 東京, 261 pp.
- 江崎保男・和田 岳 (編). 2002. 近畿地区・鳥類レッドデータブック—絶滅危惧種判定システムの開発—. 京都大学学術出版会, 京都, 255 pp.
- 橋本太郎. 1980. 三重県鳥類の分布とその生態—記録と標本—. 271 pp. (自刊)
- 橋本太郎. 1983. 三重県鳥類の分布とその生態—記録生体写真集—. 209 pp. (自刊)
- 日高敏隆 (監). 1996. 日本動物大百科第3巻 鳥類Ⅰ. 平凡社, 東京, 180 pp.
- 日高敏隆 (監). 1997. 日本動物大百科第4巻 鳥類Ⅱ. 平凡社, 東京, 180 pp.
- 樋口行雄. 1979. 三重県の鳥類相. 三重県立博物館研究報告, (1): 69-125.
- 市田則孝. 2003. 絶滅危惧種日本の野鳥 (バードライフ編)
- 伊賀市環境保全市民会議レッドデータブック作成委員会編. 2006. 伊賀のレッドデータブック—伊賀の希少動植物—. 伊賀市環境保全市民会議, 伊賀, 242 pp.
- 環境庁 (編). 1981. 日本産鳥類の繁殖分布. 大蔵省印刷局, 東京, 554 pp.
- 環境庁 (編). 1988. 動植物分布調査報告書 (鳥類). (財) 日本野鳥の会, 東京, 491 pp.
- 環境庁自然保護局・日本野鳥の会. 1988. 動植物分布調査報告書 (鳥類の集団営巣地及び集団ねぐら). (財) 日本野鳥の会, 東京, 268 pp.
- 環境庁自然保護局生物多様性センター. 1999. 生物多様性調査鳥類調査中間報告書, 環境庁自然保護局生物多様性センター, 富士吉田, 342 pp.
- 環境省自然保護局野生生物課. 2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—2 鳥類. 財団法人自然環境研究センター. 東京, 278 pp.
- 菊岡如幻. 1983. 伊水温故. 上野市古書刊行会, 上野, 427 pp.
- 清棲幸保. 1978. 日本鳥類大図鑑Ⅰ. 増補改訂版. 講談社, 東京, 444 pp.
- 清棲幸保. 1978. 日本鳥類大図鑑Ⅱ. 増補改訂版. 講談社, 東京, 898 pp.
- 清棲幸保. 1978. 日本鳥類大図鑑Ⅲ. 増補改訂版. 講談社, 東京, 236 pp.
- 黒田長久 (編・監). 1984. 決定版生物大図鑑鳥類. 世界文化社, 東京, 399 pp.
- 真木広三・大西敏一. 2000. 決定版日本の野鳥590. 平凡社, 東京, 653 pp.
- 三重県立博物館. 1985. 三重県立博物館資料目録自然科学, (3)鳥類. 三重県立博物館, 津, 18 pp.
- 中村登流. 1995. 原色日本野鳥生態図鑑 [陸鳥編]. 保育社, 大阪, 301 pp.
- 中村登流. 1995. 原色日本野鳥生態図鑑 [水鳥編]. 保育社, 大阪, 304 pp.
- 日本鳥類目録編集委員会 (編). 2000. 日本鳥類目録改訂第6版, 日本鳥学会, 帯広, 345 pp.
- 日本野鳥の会三重県支部. 1994~2004. しろちどり. (1)~(47).
- 日本野鳥の会三重県支部. 2001. 身近な自然を守るために. 日本野鳥の会三重県支部, 津, 39 pp.
- 杉浦邦彦. 1986. 三重の野鳥. 三重県その自然と動物, pp. 222-251. 三重県良書出版会, 津.
- 高野伸二. 1981. 日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会, 東京, 474 pp.
- 高野伸二. 1982. フィールドガイド日本の野鳥. (財) 日本野鳥の会, 東京, 342 pp.
- 都市鳥研究会 (編). 1991. 全国主要都市の都市鳥. 都市鳥研究会, 和光, 153 pp.
- 藤堂元甫. 1987. 定本三國地志, 上野市古書刊行会. 上野市, 上野, 1207 pp.
- 上野秀治. 1999. 四日市と紀州藩鷹場. 四日市市史第12巻, pp. 109-128. 四日市市, 四日市.
- 上野市. 2001. 上野市史民俗編上巻. 上野市, 上野, 832 pp.
- 山階芳磨. 1980. 鳥類と其の生態1巻, 出版科学総合研究所. 東京, 524 pp (復刻版).
- 山階芳磨. 1980. 鳥類と其の生態2巻, 出版科学総合研究所. 東京, 1080 pp (復刻版).

(武田恵世)

除外種

「三重県レッドデータブック2005 動物」掲載種のうち、今回の改訂により低懸念（LC）と判定された種、及び評価対象から除外した種とその理由は以下のとおりである。

(表3-1) 改訂により低懸念（LC）となった種

目名	科名	和名	学名	改訂前 県ランク	除外理由
ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus</i>	NT	前回のリスト編集時以来、生息環境に大きな変化が生じておらず、特に危機的状況にはないと考えられるため。
スズメ	ヨシキリ	オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i>	NT	前回のリスト編集時以来、生息環境に大きな変化が生じておらず、特に危機的状況にはないと考えられるため。

(表3-2) 改訂において評価の対象から除外した種

目名	科名	和名	学名	改訂前 県ランク	除外理由
アマツバメ	アマツバメ	ハリオアマツバメ	<i>Hirundapus caudacutus</i>	DD	生育状況が定かではないため、該当する評価区分なしとした。
チドリ	シギ	コシャクシギ	<i>Numenius minutus</i>	VU	三重県への渡来が偶発的と思われるため。
チドリ	ウミスズメ	マダラウミスズメ	<i>Brachyramphus perdix</i>	DD	生育状況が定かではないため、該当する評価区分なしとした。
フクロウ	フクロウ	トラフズク	<i>Asio otus</i>	DD	三重県への渡来が偶発的と思われるため。
スズメ	ムシクイ	メボソムシクイ	<i>Phylloscopus xanthodryas</i>	DD	最近の知見によりコムシクイ、オオムシクイ、メボソムシクイ3種に分かれることが明らかになり、これまでの様に1種で評価が出来なくなった。
スズメ	ヒタキ	マミジロ	<i>Zoothera sibirica</i>	DD	三重県への渡来が偶発的と思われるため。
スズメ	ヒタキ	エゾヒタキ	<i>Muscicapa griseisticta</i>	DD	主に渡りの時期の一時的な生息である。
スズメ	ヒタキ	サメヒタキ	<i>Muscicapa sibirica</i>	DD	主に渡りの時期の一時的な生息である。
スズメ	ホオジロ	ノジコ	<i>Emberiza sulphurata</i>	DD	三重県への渡来が偶発的と思われるため。
スズメ	ホオジロ	コジュリン	<i>Emberiza yessoensis</i>	DD	三重県への渡来が偶発的と思われるため。

EW

EW

CR

EN

VU

NT

DD

鳥類レッドリスト

絶滅危惧IA類（CR）

目名	科名	和名	学名	環境省	掲載P.
ハト	ハト	カラスバト	<i>Columba janthina</i>	NT	55
ペリカン	トキ	クロツラヘラサギ	<i>Platalea minor</i>	EN	55
チドリ	チドリ	シロチドリ（繁殖）	<i>Charadrius alexandrinus</i>	VU	55
チドリ	セイタカシギ	セイタカシギ	<i>Himantopus himantopus</i>	VU	56
チドリ	シギ	カラフトアオアシシギ	<i>Tringa guttifer</i>	CR	56
チドリ	カモメ	ズグロカモメ	<i>Larus saundersi</i>	VU	57
チドリ	カモメ	コアジサシ	<i>Sterna albifrons</i>	VU	57
チドリ	ウミスズメ	カンムリウミスズメ	<i>Synthliboramphus wumizusume</i>	VU	58
タカ	タカ	イヌワシ	<i>Aquila chrysaetos</i>	EN	58
タカ	タカ	チュウヒ（繁殖）	<i>Circus spilonotus</i>	EN	59
タカ	タカ	オジロワシ	<i>Haliaeetus albicilla</i>	VU	60
タカ	タカ	オオワシ	<i>Haliaeetus pelagicus</i>	VU	60
ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ（繁殖）	<i>Falco peregrinus</i>	VU	60
スズメ	ヤイロチョウ	ヤイロチョウ	<i>Pitta nympha</i>	EN	61

絶滅危惧IB類（EN）

目名	科名	和名	学名	環境省	掲載P.
カモ	カモ	オシドリ（繁殖）	<i>Aix galericulata</i>	DD	61
カモ	カモ	トモエガモ	<i>Anas formosa</i>	VU	61
チドリ	シギ	ヘラシギ	<i>Eurynorhynchus pygmeus</i>	CR	62
チドリ	ウミスズメ	ウミスズメ	<i>Synthliboramphus antiquus</i>	CR	62
タカ	タカ	サシバ	<i>Butastur indicus</i>	VU	62
タカ	タカ	ハチクマ	<i>Pernis ptilorhynchus</i>	NT	63
タカ	タカ	クマタカ	<i>Nisaetus nipalensis</i>	EN	63
ハヤブサ	ハヤブサ	コチョウゲンボウ	<i>Falco columbarius</i>		63
ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ（越冬）	<i>Falco peregrinus</i>	VU	60
スズメ	センニュウ	ウチヤマセンニュウ	<i>Locustella pleskei</i>	EN	64

絶滅危惧II類 (VU)

目名	科名	和名	学名	環境省	掲載P.
カモ	カモ	コクガン	<i>Branta bernicla</i>	VU	64
ペリカン	サギ	ササゴイ	<i>Butorides striata</i>		64
ペリカン	サギ	チュウサギ	<i>Egretta intermedia</i>	NT	65
ペリカン	サギ	ミゾゴイ	<i>Gorsachius goisagi</i>	VU	65
ツル	ツル	ナベツル	<i>Grus monacha</i>	VU	65
ツル	クイナ	ヒクイナ	<i>Porzana fusca</i>	NT	66
チドリ	チドリ	イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i>		66
チドリ	シギ	ミュビシギ	<i>Calidris alba</i>		66
チドリ	シギ	ダイシャクシギ	<i>Numenius arquata</i>		67
チドリ	シギ	アカアシシギ	<i>Tringa totanus</i>	VU	67
チドリ	シギ	コアオアシシギ	<i>Tringa stagnatilis</i>		67
タカ	タカ	オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	NT	68
タカ	タカ	ハイイロチュウヒ	<i>Circus cyaneus</i>		68
タカ	タカ	チュウヒ (越冬)	<i>Circus spilonotus</i>	EN	59
タカ	ミサゴ	ミサゴ (越冬)	<i>Pandion haliaetus</i>	NT	68
フクロウ	フクロウ	アオバズク	<i>Ninox scutulata</i>		69
フクロウ	フクロウ	コノハズク	<i>Otus sunia</i>		69
ブッポウソウ	カワセミ	アカショウビン	<i>Halcyon coromanda</i>		69
キツツキ	キツツキ	オオアカゲラ	<i>Dendrocopos leucotos</i>		70
スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>	VU	70
スズメ	クイタダキ	クイタダキ	<i>Regulus regulus</i>		70
スズメ	ヒタキ	コルリ	<i>Luscinia cyane</i>		71

準絶滅危惧 (NT)

目名	科名	和名	学名	環境省	掲載P.
キジ	キジ	ヤマドリ	<i>Syrnaticus soemmerringii</i>		71
カモ	カモ	オシドリ (越冬)	<i>Aix galericulata</i>	DD	61
ペリカン	サギ	クロサギ	<i>Egretta sacra</i>		71
ペリカン	サギ	ヨシゴイ	<i>Ixobrychus sinensis</i>	NT	72
ツル	クイナ	クイナ	<i>Rallus aquaticus</i>		72
チドリ	チドリ	シロチドリ (越冬)	<i>Charadrius alexandrinus</i>	VU	55
チドリ	チドリ	コチドリ	<i>Charadrius dubius</i>		72
チドリ	チドリ	タゲリ	<i>Vanellus vanellus</i>		73
チドリ	ミヤコドリ	ミヤコドリ	<i>Haematopus ostralegus</i>		73
チドリ	シギ	ホウロクシギ	<i>Numenius madagascariensis</i>	VU	73
チドリ	タマシギ	タマシギ	<i>Rostratula benghalensis</i>	VU	74
タカ	タカ	ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	NT	74
タカ	ミサゴ	ミサゴ (繁殖)	<i>Pandion haliaetus</i>	NT	68
フクロウ	フクロウ	コミミズク	<i>Asio flammeus</i>		74
フクロウ	フクロウ	フクロウ	<i>Strix uralensis</i>		75
ブッポウソウ	カワセミ	ヤマセミ	<i>Megaceryle lugubris</i>		75
スズメ	カササギヒタキ	サンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>		75
スズメ	ムシクイ	センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>		76
スズメ	ヒタキ	コマドリ	<i>Luscinia akahige</i>		76
スズメ	ヒタキ	キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>		76
スズメ	ヒタキ	クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>		77

情報不足 (DD)

目名	科名	和名	学名	環境省	掲載P.
キジ	キジ	ウズラ	<i>Coturnix japonica</i>	VU	77
ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	NT	77
チドリ	シギ	オジロトウネン	<i>Calidris temminckii</i>		77
チドリ	シギ	オオジシギ	<i>Gallinago hardwickii</i>	NT	77
フクロウ	フクロウ	オオコノハズク	<i>Otus lempiji</i>		77
ブッポウソウ	ブッポウソウ	ブッポウソウ	<i>Eurystomus orientalis</i>	EN	77
スズメ	ヒタキ	コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>		78

鳥類レッドリスト 新旧対照表

本書に掲載された鳥類レッドリスト（改訂後のカテゴリー）と「三重県レッドデータブック2005」に掲載した鳥類レッドリスト（改訂前のカテゴリー）との新旧対照表は以下のとおりである。

	改訂後のカテゴリー	改訂前のカテゴリー						種数	
		EX	CR	EN	VU	NT	DD		リスト外
	EX							0	
	CR		カラスバト カンムリウミスズメ イヌワシ チュウヒ（繁殖） ハヤブサ（繁殖） ヤイロチョウ	シロチドリ（繁殖） ズグロカモメ コアジサシ オジロワシ オオワシ			セイタカシギ クロツラヘラサギ カラフトアオアシシギ	14	
	EN		オシドリ（繁殖）	ハヤブサ（越冬） トモエガモ ウミスズメ サシバ ハチクマ クマタカ コチョウゲンボウ ウチヤマセンニュウ				ヘラシギ	10
	VU			キクイタダキ コルリ	チュウヒ（越冬） コクガン ササゴイ チュウサギ ヒクイナ イカルチドリ ダイシャクシギ アカアシシギ コアオアシシギ オオタカ ハイイロチュウヒ ミサゴ（越冬） コノハズク アカショウビン オオアカゲラ サンショウクイ	ミユビシギ アオバズク	ミゾゴイ ナベヅル	22	
	NT			ミサゴ（繁殖） コチドリ	タゲリ	シロチドリ（越冬） オシドリ（越冬） ヤマドリ クロサギ クイナ ホウロクシギ タマシギ ハイタカ コミミズク フクロウ センダイムシクイ キビタキ クロツグミ	ヨシゴイ コマドリ ミヤコドリ ヤマセミ サンコウチョウ	21	
	DD						ウズラ ヨタカ オジロトウネン オオジシギ オオコノハズク ブッポウソウ コサメビタキ		7
	リスト外				コシヤクシギ	チョウゲンボウ オオヨシキリ	マダラウミスズメ トラフズク ハリオアマツバメ マミジロ メボソムシクイ エゾビタキ サメビタキ ノジコ コジュリン		12
種数		0	7	17	18	17	20	7	

カラスバト

ハト目ハト科

三重県：絶滅危惧IA類 (CR)

旧県：絶滅危惧IA類 (CR)

環境省：NT

近畿：絶滅危惧

選定理由： 紀北町の3か所の島嶼のみで繁殖しており、個体数は極めて少ない。

種の概要： 留鳥。全長約40 cm。ドバトより大きく、尾は比較的長い。雌雄同色。体は黒色で紅紫色や緑色の金属光沢がある。嘴は先が淡黄色で基部付近が淡青緑色。足は赤い。頭部はヘルメットをかぶったような感じの膨らみがある。照葉樹林に生息し、おもにタブ、ヤマモモなどの実を食べる。繁殖期はおもに2～9月。よく茂った照葉樹林の樹上に皿状の巣をつくる。

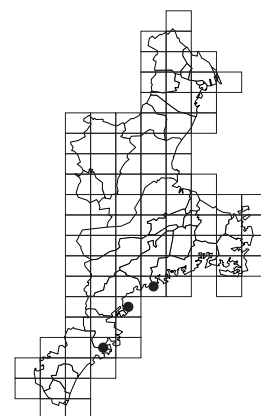
分布： 日本と朝鮮半島南部のおもに島嶼、濟州島、鬱陵島に分布する。国内では、留鳥として本州中部以南の島嶼に分布する。

現況・減少要因： 紀北町の大島、鈴島、赤野島で繁殖しているだけである。冬期にはこの島に近い内陸の照葉樹林で見られることもある。減少要因は、照葉樹林の減少により木の実が激減したためと考えられる。

保護対策： 現在の生息環境を保護し、さらに照葉樹林を復元する必要がある。

特記事項： 国指定天然記念物、県指定希少野生動物種。

文献： 9, 21.



(武田恵世)

クロツラヘラサギ

ペリカン目トキ科

三重県：絶滅危惧IA類 (CR)

旧県：—

環境省：EN

近畿：—

選定理由： 生息地点数は5以下であり、個体数はごく少ないが、ほぼ毎年飛来し、迷行ではないと判断される。

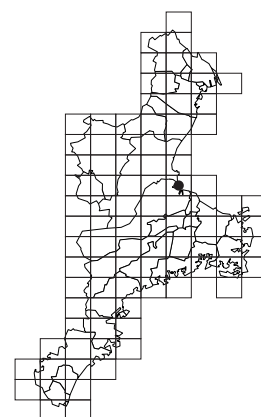
種の概要： 全長73.5 cm。大型の水鳥、ヘラ状の嘴が特徴である。水中の甲殻類、小魚を採餌する。近縁種ヘラサギとよく似ている。

分布： 朝鮮半島西海岸の島嶼で繁殖する。中国遼寧省、ロシア沿海州でも繁殖の可能性はある。主な越冬地は台湾、日本、ベトナムなどである。

現況・減少要因： 三重県ではほぼ毎年、1羽が金剛川、櫛田川河口付近に飛来する。周辺の開発が進み、生息環境が悪化している。日本では主に九州北部の干潟、湿地で約300羽が越冬する。世界的に絶滅が危惧されており、全世界での個体数は2012年に2,693個体。減少の主な原因は中国、台湾、韓国、日本など越冬地の開発、改変である。

保護対策： この種の日本での越冬地を増やすことは種の絶滅を回避する上で重要であると想定される。飛来地である金剛川河口周辺の現状を変更しない。

文献： 18, 24, 25.



(平井正志)

シロチドリ

チドリ目チドリ科

三重県：絶滅危惧IA類(CR) (繁殖)

準絶滅危惧(NT) (越冬)

旧県：絶滅危惧IB類(EN) (繁殖)

準絶滅危惧(NT) (越冬)

環境省：VU

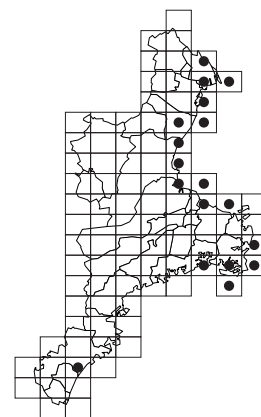
近畿：NT

選定理由： かつては三重県下の砂浜海岸、海寄りの造成地等人口の裸地で普通に繁殖していたが、近年繁殖個体が減り、かつ繁殖成功例は多くない。繁殖地点は10以下であろうと考えられる。

種の概要： 全長17.5 cm。周年、砂浜海岸、干潟で普通に見られる小型のチドリ。首の黒い輪は胸で途切れている点でコチドリなどと区別できる。冬には大きな群になることがある。繁殖地は主に内湾に面した砂浜海岸の砂地、草のまばらに生えた場所、あるいは海に近い埋め立て地などの人工的な裸地であり、地面を少しくぼませ、貝殻などを少し敷いて卵を産み、抱卵する。卵は保護色であり、巣は極めて見つけにくい。抱卵中に巣に近寄ると歩いて逃げる。人が巣の近くに長く留まると抱卵を放棄する。また、生まれたヒナはすぐに巣を離れ、親について餌を取る。約3週間で飛べるようになる。

分布： 広く全世界の温帯で繁殖し、極に近い地域で繁殖するものは南で越冬する。日本各地の海辺で繁殖し、越冬する。1995年11月に熊本で標識された個体が、1996年7月の繁殖期に四日市市吉崎海岸で回収捕獲されているので、繁殖後には南で越冬する渡りをしていると考えられる。三重県の海岸での繁殖個体は減少していると考えられる。なお、地図に示されているのは個体が記録された生息地点であり、繁殖の確認された地点ではない。

現況・減少要因： かつては津市などの自然砂浜海岸で繁殖していた。1990年代後半には20羽前後のヒナが津市の海



- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

岸で確認されている。しかし、近年は数羽程度に減少している。また、埋め立て地など人工的な裸地で集団で繁殖する場合もあったが、近年は埋め立て地そのものがなくなっている。さらに、海辺のレジャーが盛んになり、繁殖する自然の砂浜海岸に人が多く立ち入るようになり、繁殖環境が悪化した。海岸護岸の改修などで砂浜海岸が縮小した場合もある。カラス類など捕食者が増えたことも減少の要因であろうと推定される。その他にも繁殖を阻害する要因があると考えられる。繁殖数の回復の兆候は見られない。繁殖個体の高齢化が進んでいる可能性もある。

保護対策： 繁殖期には繁殖地である砂浜海岸での人の活動を制限する。砂浜海岸をこれ以上減らさない。
特記事項： 県鳥。
文 献： 13, 14.

(平井正志)

セイトカシギ チドリ目セイトカシギ科
Himantopus himantopus

三重県：絶滅危惧IA類 (CR)
旧県：情報不足 (DD)

環境省：VU
近畿：—

選定理由： 生息地点は9であるが、全国的に数が少ない。県下でも生息地がごく限られている。

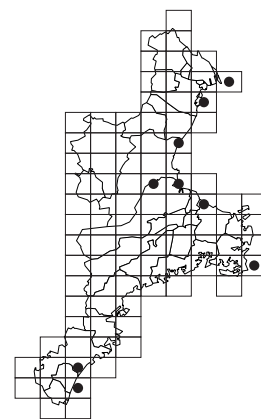
種の概要： 全長31 cm。翼、背が黒く、体は白い。長いピンク色の脚が特徴の水鳥。湿地に棲み、水中の甲殻類、小魚を捕食する。家族群で行動することが多い。

分 布： 広く温帯および熱帯で繁殖し、北で繁殖するものは南へ渡る。日本では主として冬鳥、各地の干潟、湿地に飛来する。近年は周年生息する場合も多い。1975年に愛知県で初めて繁殖が確認され、それ以降、国内でいくつかの繁殖例がある。

現況・減少要因： 全国のシギ・チドリ調査では100~200羽が記録されている。三重県では通年15羽程度が滞在し、四日市と松阪で繁殖成功例が各1例ある。生息地である干潟、湿地の環境が悪化している。既知の繁殖地でも太陽光発電の設置など周辺の環境が悪化している。

保護対策： 干潟、湿地の現状を維持する。人や捕食者が容易に近づけない繁殖可能な場所を確保する。

文 献： 1, 17.



(平井正志)

カラフトアオアシシギ チドリ目シギ科
Tringa guttifer

三重県：絶滅危惧IA類 (CR)
旧県：—

環境省：CR
近畿：絶滅危惧

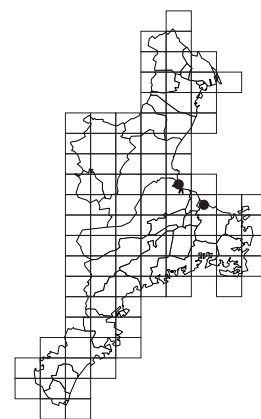
選定理由： 県内でほぼ隔年に渡来を認める。世界的に絶滅の危機にある種類であり、本県は渡り途中の生息地として重要であると考えられる。

種の概要： 全長29~32 cm。腹部、腰は白く、尾羽は白く黒い横縞が入る。嘴は黒色で太く、やや上方へ反る。嘴の基部は黄緑がかかる。後脚は黄緑色で、アオアシの由来になっている。幼鳥は上面が灰褐色の羽毛で覆われ、羽縁が白い。夏羽は上面が黒褐色の羽毛で覆われ、羽縁が白い。喉から胸部にかけて黒褐色の斑紋が入り、英名spotted (斑紋のある) の由来になっている。冬羽は上面が灰色の羽毛で覆われ、淡褐色の縦縞が入る。極めて希少である。

分 布： ロシアのサハリン (樺太) のみで繁殖し、インド、バングラデシュ、マレー半島で越冬する。日本では主に秋の渡りの時期にまれに観察される。

現況・減少要因： 伊勢湾岸の泥質干潟でおおよそ隔年に渡来を認めるが、泥質干潟が河川や海岸の浚渫工事などで消滅したり、砂質化したりして、減少傾向にある。

保護対策： 干潟、特に泥質干潟を保護すること。



(武田恵世)

ズグロカモメ

Larus saundersi

カモメ目カモメ科

三重県：絶滅危惧IA類 (CR)

旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省：VU

近畿：絶滅危惧

選定理由： 既知の生息地点数は5以下であり、個体数も20前後と少ない。

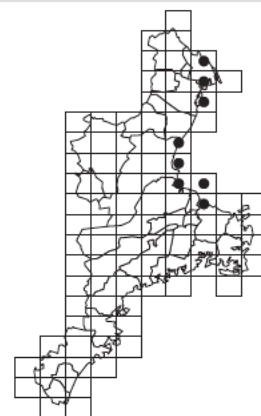
種の概要： 冬鳥。体長32 cm。キジバトとほぼ同じ大きさの小型カモメ。夏羽は頭部が黒くなる。おもに干潟に渡来する。世界的希少種。

分布： 中国渤海沿岸塩性干潟で繁殖。総個体数は7,000~9,000羽で、繁殖個体群は2,500程度と推定されている。冬季は中国東シナ海海岸、朝鮮半島南端、日本へ渡る。国内での飛来は局地的で、干潟への依存性が高い。1998年に諫早湾堤防の締め切りにより、生息地が奪われ、三重県にも飛来するようになった。近年の調査では全国での渡来数は約2,400羽。

現況・減少要因： 県内では伊勢湾沿岸の河口部の干潟に渡来し、松阪市、津市、明和町、鈴鹿市などで毎年記録がある。渡来数は約20羽程度。2013年度における調査で、国内では、越冬個体としては3,623羽の生息が確認されている。

保護対策： 採餌場である干潟を、生物が豊かになるような保全に努める。天然記念物指定などの法的な保護が必要である。

文献： 26, 29, 30.



(前澤昭彦)

コアジサシ

Sterna albifrons

チドリ目カモメ科

三重県：絶滅危惧IA類 (CR)

旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省：VU

近畿：絶滅危惧

選定理由： 既知の生息地点数は10程度であるが、自然の繁殖環境がほとんど失われている。

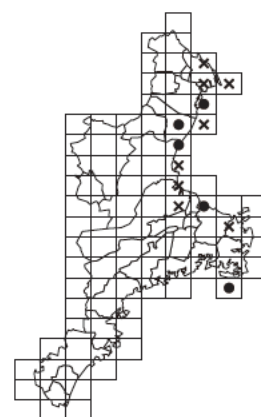
種の概要： 夏鳥。全長約28 cmの小形のアジサシ。体の上面は青灰色で、下面は白色、嘴が黄色で先端が黒い。脚は橙黄色。体が細長く、ツバメのように翼が尖っており、尾羽が二股になっている。夏羽では額が白く、頭上から後頭にかけて黒い。冬羽では、額の白色部が頭頂まで広がり、嘴が黒く、脚が黒か褐色となる。飛びながら、「キリッキリッ キー キー」と鳴く。餌は小型の魚類で、空中から狙いを付けて水中に飛び込み捕獲し、アジサシの名前の由来となっている。広い河原や砂浜などの裸地に集団で営巣し、集団で防衛する。卵とヒナは、砂礫に似た模様がある保護色である。繁殖成功率が高いのは、およそ3 ha以上で植被率約30%以下の裸地に、約500羽以上が集まった場合である。

分布： 種コアジサシは、ユーラシアから北アメリカの中緯度地帯で繁殖し、ユーラシア南部、オーストラリア、アフリカ、南アメリカで越冬する。極東の亜種コアジサシは、日本と中国東部、南部で繁殖し、東南アジアからニュージーランドで越冬する。国内では、本州の東北地方南部以南に渡来し、繁殖する。県内では、桑名市、四日市市、亀山市、津市、松阪市、伊勢市、志摩市で記録がある。

現況・減少要因： 約30年前は全国的にも普通に見られる鳥とされていたが、自然状態の場所で繁殖に成功した最近の例は四日市市の吉崎海岸、志摩市和具大島などしかなく、非常に少なくなっている。一方、近年は木曾岬干拓地、四日市市、津市などの工事中の埋立地や裸地で営巣することがまれにみられるのみである。減少要因は、ダムや井堰による河川の土砂流下阻害による河原の減少や海岸浸食により、広い砂礫地が激減したことである。

保護対策： 現在残されている広い河原や砂浜をこれ以上破壊しないこと。海岸浸食の防止は特に重要であり、河口や沿岸の砂州は可能な限り残す対策が必要である。広い河原や砂浜を復元するには、ダムや井堰の撤去か、土砂流下可能なものに改造するしかないと考えられる。コアジサシやシロチドリなどが営巣する河原や砂浜などの裸地は、川の増水や波浪で1年に数回攪乱されることで維持されている環境であり、攪乱がないと草が生え、やがて草原に移行し、営巣ができなくなる。河原の形成や砂州の形成、砂浜の形成など、小規模な自然変化は許容するような河川整備、海岸整備を進める必要がある。具体的には、河川では高水敷は造らず、井堰やダムを統合などにより減らし、また、ダムや井堰からのフラッシュ放流などでの攪乱を行うこと。海岸では、松林を過度に植林しないこと、堤防の前面にはハマゴウなどの本来の海岸植物を生育させ、高波による海岸浸食も防止する必要がある。また、川の中州や河口や沿岸の砂州は可能な限り残す必要がある。

(武田恵世)



哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- EW
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

カンムリウミスズメ チドリ目ウミスズメ科
Synthliboramphus wumizusume

三重県：絶滅危惧IA類 (CR)
 旧県：絶滅危惧IA類 (CR)

環境省：VU
 近畿：絶滅危惧

選定理由： 生息地点は10以下であるが、繁殖地は耳穴島など紀北町紀伊長島沖の島嶼であり、繁殖個体数も少ないと考えられる。

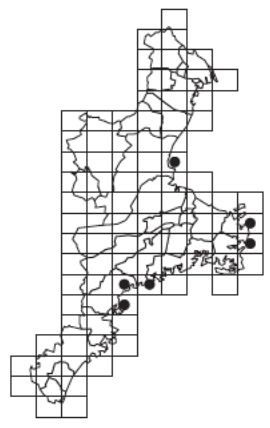
種の概要： 全長24 cm。体の上部は青灰色、下部は白色、顔と頭頂は黒く、喉と後頭部は白い。頭頂には長い冠羽がある。近縁のウミスズメとは顔の白黒のパターンの違い、後頭部の色で区別できる。繁殖地は異なる。両種とも繁殖期以外は陸地に近づかない外洋性海鳥である。

分布： 本種の繁殖地は日本および韓国の離島に限られる。ロシアのウラジオストク近郊のピョートル大帝湾でも繁殖の可能性があるが、詳細は不明である。日本では三重県耳穴島周辺の他、宮崎県枇榔島、京都府杵島、福岡県沖ノ島属島小屋島、東京都伊豆諸島等で繁殖する。小屋島ではドブネズミのため、絶滅に近い状況である。石川県七ツ島では1980年代の繁殖確認があるが、現在の状況は不明である。人の近づけない、海に面した険しい岸壁の穴などで繁殖するため、繁殖つがい数の算定が難しい。繁殖期以外は周辺の海上で過ごすと思われるが、外洋での発見は困難であり、詳細は不明である。

現況・減少要因： 三重県では紀伊長島沖の耳穴島周辺の島嶼で繁殖し、周辺海域で冬から春にかけて生息する。非繁殖期の分布海域は明らかでない。志摩半島、伊勢湾でも稀に記録される。繁殖は現在100つがい以下であろうと推定されている。1969年には倉田により100~200つがいと推定されているので減少していると思われる。全世界での個体数はIUCNの推定では10,000羽以下である。繁殖期は極めて敏感な鳥であるので、繁殖地周辺への人の接近が繁殖の妨害になっていると考えられる。

保護対策： 生息環境の改変を避け、磯釣りに際しては余った撒き餌は捨てずに持ち帰り、カラスやカモメ類を集めないことが必要である。また、持続的な海洋資源の利用を進めるとともに、海洋汚染を防止する必要がある。

文献： 3, 4, 15, 22, 35.



(平井正志)

イヌワシ タカ目タカ科
Aquila chrysaetos

三重県：絶滅危惧IA類 (CR)
 旧県：絶滅危惧IA類 (CR)

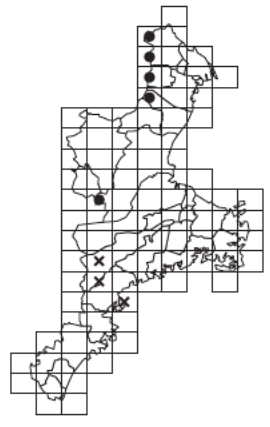
環境省：EN
 近畿：危機的絶滅危惧

選定理由： 生息地点数は5であるが、鈴鹿山脈北部でひとつがいのみが3~4年に1回の割合で繁殖している。

種の概要： 全長85 cm、翼開長190 cm。山地に棲息する大型の猛禽。成鳥では全身黒褐色で頭部から肩にかけて淡褐色になる。幼鳥では翼、尾羽に大きな白斑があり、年と共に消失する。自然草原、灌木林、雪崩後など樹高の低い場所で、ノウサギ、ヤマドリ、アオダイショウなどを捕食する。急峻な岩場の岩棚に巣を作り、毎年利用する。

分布： ユーラシア大陸、北アメリカ大陸とその周辺の島に分布。日本では山地に棲む。日本では本州に棲息。日本には150~200つがいが生息すると推定されているが、繁殖成功率は極めて低い。九州の個体は絶滅寸前であり、四国では確実な生息が確認できていなくなっている。

現況・減少要因： 県内ではいなべ市などの鈴鹿山脈北部に生息する。現在三重県内で営巣しているのはひとつがいのみであり、その採餌行動域は滋賀県側にも広がり、行動域は隣接するつがいのそれに接しており、孤立したつがいではなく、2010年以来繁殖に成功していない。これまでの繁殖成功率も高い。かつての大台ヶ原山系でも別つがいが繁殖していたが、近年の確実な繁殖記録はない。飛翔力が強く、非繁殖個体は分散する傾向が強いため、鈴鹿山脈南部や奈良県境付近でも近年の目撃情報があるが、確実な繁殖記録はない。クマタカと異なり、高木が優占する森林の中では狩りができない。かつて山岳地帯に広く存在して伐採地、幼齢植林地、萱場などが消滅し、狩場は減少している。また、県下では藤原岳山頂から御池岳山頂へ広がる準平原を主な狩場としていると



哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

考えられるが、鉱山開発で、生息地が狭められている。上記の県内のつがいはも鉱山開発などの影響を受けると考えられる。さらに近年のニホンジカの増加による森林下層の植生の消失はウサギ、ヘビ、ヤマドリなどの餌動物の減少を招き、イヌワシの生存にとって悪影響を与えていると想定される。

保護対策： 本県のつがいは日本での生息域の西端、南端に近い繁殖個体であり、貴重である。棲息地での鉱山開発など影響ある開発は最小限にすべきである。狩場の創出は極めてむずかしい。ニホンジカを駆除し、森林下層の植生回復に努める。野鳥写真マニア等の影響を避けるため、生息情報の管理を厳しくすべきである。

文 献： 19. 27. 43.

(平井正志)

チュウヒ <i>Circus spilonotus</i>	タカ目タカ科	三重県：絶滅危惧IA類(CR)(繁殖) 絶滅危惧II類(VU)(越冬) 旧県：絶滅危惧IA類(CR)(繁殖) 絶滅危惧II類(VU)(越冬)	環境省：EN 近畿：危機的絶滅危惧
---	--------	---	----------------------

選定理由： 生息地点数は10程度であるが、繁殖地は木曾岬干拓地の1か所のみである。また越冬地は河川の葦原を伴った河口域に限られるが、開発、河川改修、太陽光発電設置などにより近年狭められている。

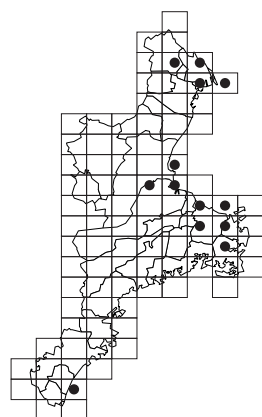
種の概要： 全長48 cm (雄), 58 cm (雌)。トビよりもやや小さく、細身のタカ。つばさを浅いV字型に保ち、アシ原の上空を低く飛ぶ。ネズミ類、小鳥類を捕食する。冬鳥として渡来する個体がほとんどである。

分 布： 本種はユーラシア大陸東側に生息する。開けたアシ原などの地上で営巣する。日本では本県以外に北海道、青森県、秋田県、石川県などで繁殖する。いずれも自然のアシ原かあるいは人工的に維持されたアシ原である。青森と石川での繁殖は数つがいのみである。関東以西で恒常的な繁殖地は木曾岬干拓地と石川県河北潟のみである。かつて大阪、岡山、山口などで繁殖が記録されたが、いずれも現在は繁殖できる環境にない。岡山では太陽光発電の設置により、繁殖が困難になった。非繁殖期は南へ渡り越冬する。越冬地は河口付近のアシ原である。餌場として広大なアシ原を必要とする。本種は集団で、地上でねぐらを取ることが知られており、木曾岬干拓地、渡良瀬遊水地などがねぐらとして知られている。

現況・減少要因： 県下での繁殖は木曾岬干拓地だけである。2003年には3つがいが繁殖に成功したが、2005年から2008年までは毎年ひとつがいのみが成功した。2009年には2つがいが成功したが、2010年から2013年は繁殖に成功していない。近年は、木曾岬干拓地での公園建設、太陽光発電などにより繁殖地、採餌地が著しく狭められた。また、干拓地周囲の農地も資材置き場や倉庫などに改変され、採餌に利用できなくなりつつある。冬鳥として飛来する個体の越冬地は木曾川、揖斐川、長良川、雲出川、櫛田川、宮川などの河口周辺のアシ原であるが、近年、太陽光発電設置、埋め立て、河川改修などにより狭められつつある。

保護対策： 木曾岬干拓地はこれ以上改変しない。木曾岬干拓地の繁殖地に、ノラネコ、ノライヌなど地上性の捕食動物が入り込まないように処置する。野鳥撮影マニアが巣に近づかないよう対策をする。上記河口の越冬地のアシ原はこれ以上改変しない。

(平井正志)



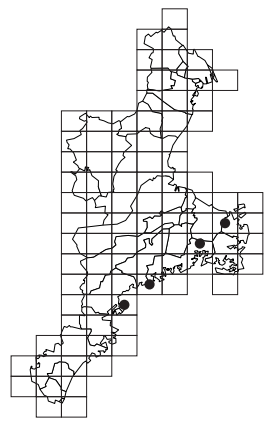
- 哺乳類
- 鳥類**
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物

オジロワシ タカ目タカ科
Haliaeetus albicilla

三重県：絶滅危惧IA類 (CR)
 旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省：VU
 近畿：NT

選定理由： 既知の生息地点数は5以下であり、毎年ごく少数の越冬が確認されているのみである。
種の概要： 冬鳥。全長80～95 cm。翼開長180～230 cm。翼は幅が広い。尾は短くて少しくさび形。体全体は褐色であるが頭部は淡色の個体が多い。尾は白色。嘴と足も黄色。餌は、主に大型の魚類であるが、鳥類やウサギ、ヘビも捕食し、屍肉も食べる。海岸に生息することが多い。
分布： ユーラシア大陸北部に分布する。日本へは10月に渡来し、北海道で繁殖する一部を残し、3月には繁殖地へ去る。
現況・減少要因： 県内では冬期に伊勢市から尾鷲市の海岸でごく少数が観察される。
保護対策： 海洋資源を減らさないような、持続可能な漁業を進める。また、近年、鉛中毒による死亡事例も確認されており、狩猟による鉛散弾の使用を早急に全廃する必要がある。
特記事項： 国指定天然記念物。



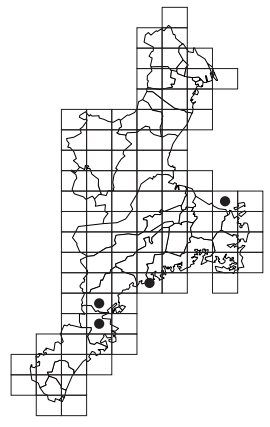
(武田恵世)

オオワシ タカ目タカ科
Haliaeetus pelagicus

三重県：絶滅危惧IA類 (CR)
 旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省：VU
 近畿：絶滅危惧

選定理由： 既知の生息地点数は5以下であり、毎年ごく少数の越冬が確認されているのみである。
種の概要： 冬鳥。全長88～102 cm。翼開長220～245 cm。体重4.1～6.9 kgにもなる大型のワシ類で、成鳥は全身黒褐色で肩羽とくさび形の尾羽が白く、脚と巨大な嘴は黄色である。若鳥は全体にやや薄い黒褐色をしている。餌はおもに魚類で、哺乳類、鳥類も食べる。海岸に生息することが多い。推定個体数は世界中で5,000以下とされている。
分布： オホーツク海沿岸で繁殖し、大部分の個体は北海道で越冬する。
現況・減少要因： 県内では、冬期に鳥羽市から尾鷲市の海岸でごく少数が観察される。
保護対策： 海洋資源を減らさないような、持続可能な漁業を進める。鉛中毒による死亡例が多く、狩猟による鉛散弾の使用を早急に全廃する必要がある。また死んだ養殖魚の投棄を防止し、適正な処理を行う必要がある。
特記事項： 国指定天然記念物。
文献： 6, 7。



(武田恵世)

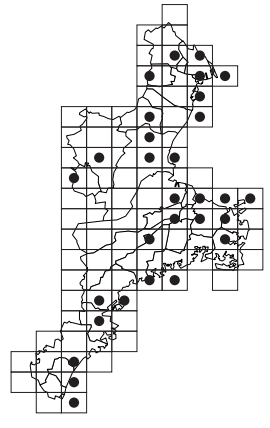
- EW
- EW
- CR**
- EN
- VU
- NT
- DD

ハヤブサ ハヤブサ目ハヤブサ科
Falco peregrinus

三重県：絶滅危惧IA類(CR)(繁殖)
 絶滅危惧IB類(EN)(越冬)
 旧県：絶滅危惧IA類(CR)(繁殖)
 絶滅危惧IB類(EN)(越冬)

環境省：VU
 近畿：NT

選定理由： 県内では繁殖期以外は生息数は比較的多いが、繁殖個体はきわめて少ないと思われる。
種の概要： 留鳥。体長40～50 cm。翼開長80～120 cm。カラスより少し小さいくらいの鳥。高速で飛翔。島嶼の断崖に営巣することが多い。近年は市街地のビルの窓辺や鉄塔の鉄骨の隙間に営巣したりする。餌はおもに飛行している鳥類を足で蹴って仕留める。カラスを捕食することもある。
分布： ユーラシア、アフリカ、オーストラリア、インド、北アメリカ大陸などに生息。国内では北海道から九州、南西諸島、伊豆諸島等に分布する。
現況・減少要因： 県内ではごく少数が繁殖している。冬期には、越冬個体が渡来することにより数が増え、ほぼ県内全域で見られる。釣り人などの繁殖地域への立ち寄りが安定繁殖の脅威となっていると思われる。
保護対策： 主に島嶼の断崖で繁殖する営巣地周辺への人の立ち入りを極力抑え、繁殖行動に脅威を与えないようにする。
特記事項： 国内希少野生動物植物。
文献： 21, 31, 39。



(前澤昭彦)

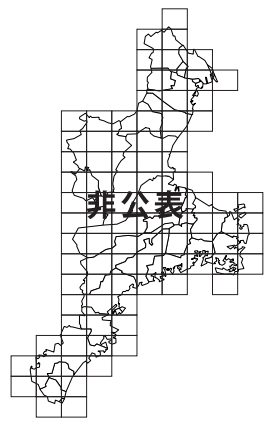
哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ヤイロチョウ *Pitta nympha* スズメ目ヤイロチョウ科

三重県：絶滅危惧IA類 (CR)
旧県：絶滅危惧IA類 (CR)

環境省：EN
近畿：危機的絶滅危惧

選定理由： 既知の生息地点数は5以下であり、生息は極めて限定的であり、個体数も少ないと推定される。
種の概要： 夏鳥。体長18 cm。体は茶色、緑色、コバルト色、黄色など色彩に富む。よく茂った広葉樹林を好み、地上でミミズなどの餌を採る。特徴のある大きな声でさえずる。
分布： 日本では本州中南部、四国、九州で繁殖するが、繁殖は局地的である。冬はインド、中国南部、東南アジアで越冬する。
現況・減少要因： 三重県中部以南に生息する。繁殖していると推定されるが、数は極めて少ないと推定される。広葉樹林の減少、すなわちスギヒノキの植林が生息地を狭めている。
保護対策： 生息地である広葉樹林を保全、拡大し、棲息が疑われる場所では林道などの開発工事は繁殖に影響のないように特段の配慮が必要である。



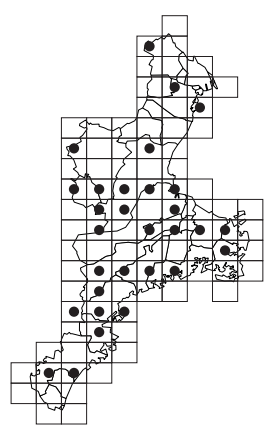
(平井正志)

オシドリ *Aix galericulata* カモ目カモ科

三重県：絶滅危惧IB類 (EN) (繁殖)
準絶滅危惧 (NT) (越冬)
旧県：絶滅危惧IA類 (CR) (繁殖)
準絶滅危惧 (NT) (越冬)

環境省：DD
近畿：NT

選定理由： 繁殖期には県内では1か所で営巣しているのみであり、冬期の個体数は200以下である。
種の概要： ごく少数が留鳥。主に冬鳥。全長約45 cm。オスの繁殖羽は、後頭の羽毛は冠羽状で、銀杏羽がある。メスは灰褐色の斑紋があり、目の周囲に白勾玉形の斑紋がある。常緑広葉樹が水面を覆う水辺を好み、カシやシイなどのドングリを好んで採食する。営巣は大木の樹洞で行う。
分布： 中国東北部から日本で繁殖し、西日本から中国南部で越冬する。
現況・減少要因： 近年の確実な繁殖記録は津市美杉町の1か所のみである。冬期には、県内各地で見られるが、他のカモ類に比べて個体数は少ない。減少要因は、営巣可能な樹洞のできる大木、餌資源となる広葉樹林、河畔林や池縁の森林の減少によると考えられる。
保護対策： 営巣可能な大木や広葉樹林（特にドングリの実る種類）、休息場ともなる河畔林や池縁の森林を保護し、復元することである。



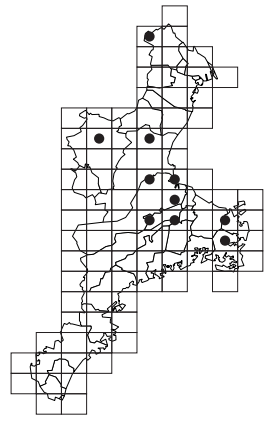
(武田恵世)

トモエガモ *Anas formosa* カモ目カモ科

三重県：絶滅危惧IB類 (EN)
旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省：VU
近畿：準絶滅危惧

選定理由： 既知の生息地点数は10以下であるが、50未満の個体数しかいないと考えられる。
種の概要： 冬鳥。全長約40 cm。オスの顔には黄白色と緑黒色のともえ形の斑紋がある。メスは全身褐色で黒い斑があり、嘴の根元に小白円紋がある。おもに植物食で、草の種子などを食べる。20世紀後半に世界的に数が激減し、推定個体数21万羽、日本全体で2,000羽程度が見られるに過ぎない。
分布： ロシア東部のタイガやツンドラの湿地で繁殖し、中国揚子江流域から朝鮮半島、日本で越冬する。国内では、主に関東地方以西で越冬する。
現況・減少要因： 松阪市、伊勢市などで数十羽が越冬している。減少要因は、水生植物が減少したことによる影響が大きいと考えられる。
保護対策： 池など現在の生息環境を保護し、水生植物が豊富な浅い水辺の環境を復元することが必要である。



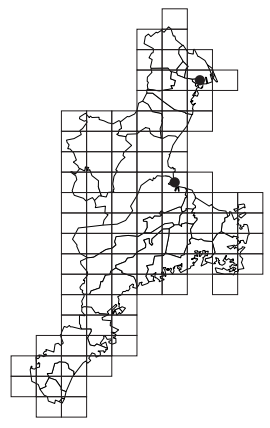
(武田恵世)

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- EW
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

ヘラシギ チドリ目シギ科 三重県：絶滅危惧IB類 (EN)
Eurynorhynchus pygmeus 旧県：—

環境省：CR
 近畿：絶滅危惧

選定理由： 県内でほぼ隔年に渡来を認める。世界的に絶滅の危機にあり、本県は重要な渡来地であると考えられる。
種の概要： 全長14～16 cm。嘴は黒く、短く先がヘラ状である。胸部から腹部が白く、夏羽は頭部から胸部にかけて赤褐色で暗色斑がある。冬羽は上面が白い灰色、頭部から胸部にかけて白い。嘴を左右に振って泥や砂の中にいる甲殻類を捕らえる。全世界での生息数は約4,000羽と推定されている。
分布： シベリア東部からカムチャッカ半島で繁殖し、中国南東部からインドシナ半島、インド北東部で越冬する。日本には渡り途中で渡来し、採餌する。県内では伊勢湾岸の泥質干潟で記録がある。
現況・減少要因： 伊勢湾岸の泥質干潟でおおよそ隔年に渡来を認めるが、泥質干潟が河川や海岸の浚渫工事などで消滅したり、砂質化したりして、減少傾向にある。
保護対策： 干潟、特に泥質干潟の保護。

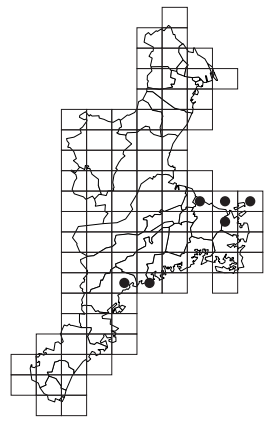


(武田恵世)

ウミスズメ チドリ目ウミスズメ科 三重県：絶滅危惧IB類 (EN)
Synthliboramphus antiquus 旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省：CR
 近畿：—

選定理由： 既知の生息地点数が5以下であり、個体数は少ない。
種の概要： 冬鳥。体長は約25 cmで、からだは丸く頸が短い。頭は黒、首と腹は白、背中と翼は灰黒色。夏羽は後頭部に白斑があらわれ喉が黒くなる。雌雄同色。餌は小型の魚類やエビ、カニ類で、潜水して捕食する。
分布： 北太平洋に分布し、おもに千島列島からアリューシャン列島、アラスカ西部などの島嶼部で繁殖する。冬期も繁殖地周辺の海上で過ごす。日本近海まで渡るものもある。国内では、主に北日本の海上で越冬し、九州や沖縄でもまれに確認される。北海道羽幌町天売島、岩手県三貫島などでは少数が繁殖するとみられる。
現況・減少要因： 四日市市から鳥羽市にかけての伊勢湾海上、志摩市から紀北町にかけての熊野灘沿岸で、1～数十羽の群が見られる。イワシ類やイカナゴ類などの餌資源の減少が減少要因になると考えられる。
保護対策： 海洋資源を減らさないような、持続可能な漁業を進める。
文献： 21, 41.

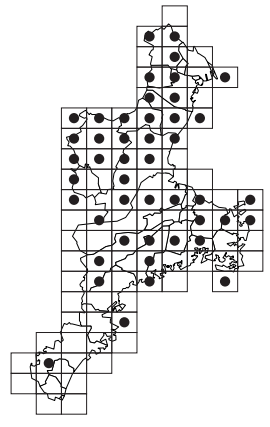


(武田恵世)

サシバ タカ目タカ科 三重県：絶滅危惧IB類 (EN)
Butastur indicus 旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省：VU
 近畿：絶滅危惧

選定理由： 県内に広く分布するが、近年、減少傾向が著しい。250未満の個体数しかないと考えられる。
種の概要： 夏鳥。体長約50 cm、翼開長約100 cm。カラスくらいの大きさで、オオタカに似るが、全身赤褐色。カエルなどの両生類や爬虫類、昆虫類をおもな餌としている。三重県の中央構造線沿いは渡りの重要な経路にあたる。
分布： アムール地方南部から日本で繁殖し、大部分は東南アジアまで渡るが、一部は南西諸島・沖縄でも越冬する。国内では、青森県以南で繁殖する。八重山諸島では留鳥である。
現況・減少要因： 県内の丘陵地帯で広く繁殖しているが、近年、減少が著しい。例えば、現在、伊賀地方では10つがい前後が繁殖しているが、約30年前に比べ半減している。減少の原因は、圃場整備や河川改修で、川や水路が垂直に近いコンクリート張りにされ、カエル類の往来が遮断され、両生爬虫類が激減したことやアカマツ林や広葉樹林の減少と考えられる。
保護対策： 「環境保全を重視する農林水産業への移行」に基づく、農地の改良を早く実施し、両生爬虫類を増やし、自然林を保全し、復元する必要がある。
文献： 33.



(武田恵世)

ハチクマ
Pernis ptilorhynchus

タカ目タカ科

三重県：絶滅危惧IB類 (EN)
旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省：NT
近畿：絶滅危惧

選定理由： 県内に広く分布するが、250未満の個体数と考えられる。

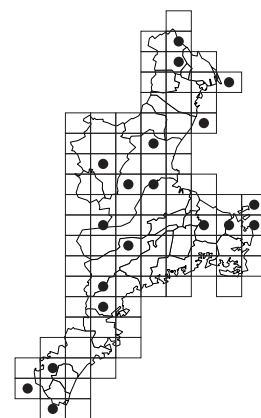
種の概要： 夏鳥。体長約60 cm、翼開長約130 cmでトビより少し小さい。色彩は個体変異が大きく、赤色形と白色形に大別される。下面は赤褐色と白の鷹斑模様で首と尾羽が長く、翼の幅が広い。餌は主に中小型のハチ類の幼虫や両生爬虫類。

分布： ユーラシア大陸の亜寒帯から温帯地域とインドから東南アジアに分布。国内では本州以北の低山帯に渡来、繁殖し、中国南部から東南アジアで越冬する。

現況・減少要因： 県内の丘陵地で繁殖しているが、近年減少が著しい。減少要因は、戦後の拡大造林や開発により広葉樹林、アカマツ林が減少したために餌となるハチ類が減少し、また営巣木となる大木も減少したためと考えられる。また、近年の圃場整備と水路や川の改修により、餌となる両生類、爬虫類の減少が著しいことも大きな要因と考えられる。

保護対策： アカマツ林や広葉樹林などの保護、復元。「環境保全を重視する農林水産業への移行」政策に基づく農地改良を実施すること。

文献： 33, 45.



(武田恵世)

クマタカ
Nisaetus nipalensis

タカ目タカ科

三重県：絶滅危惧IB類 (EN)
旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省：EN
近畿：絶滅危惧

選定理由： 県内の山地帯では広く生息するが、個体数は少ない。20~40 km²に1つがい程度で生息している。全国的には1,800を超える程度の個体数であろうと思われる。

種の概要： 留鳥。体長70~80 cm、翼開長140~165 cmの大型のタカ。アカマツ、モミなどの大木に畳一畳ほどの巨大な巣を作る。

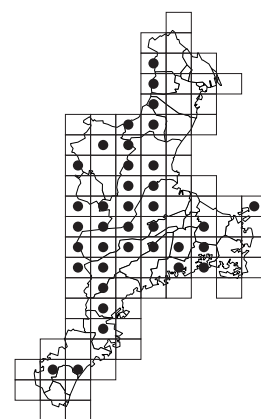
分布： 日本列島から中国南部ヒマラヤ、インド南端部、スリランカに分布。日本では、全国に留鳥として生息する。

現況・減少要因： 県内では各地で繁殖しているが、繁殖成功率は約30%である。大規模林道建設など大規模な工事は繁殖への脅威となっている。また、広葉樹林の減少により、本種の餌となる鳥類や小中型哺乳類、ヘビなどが減少、営巣木となる大木も減少している。

保護対策： スギ、ヒノキ人工林は広葉樹林への転換を促進させ、本種の餌資源を多様に保てるよう豊かな生態系を再構築していく。近年大径木に生育したスギに営巣することが増えてきているので、大径木の針葉樹の保護にもつとめる必要がある。

特記事項： 国内希少野生動物植物種。

文献： 11, 21, 29, 31, 39, 42, 45.



(前澤昭彦)

コチョウゲンボウ ハヤブサ目ハヤブサ科
Falco columbarius

三重県：絶滅危惧IB類 (EN)
旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省：—
近畿：絶滅危惧

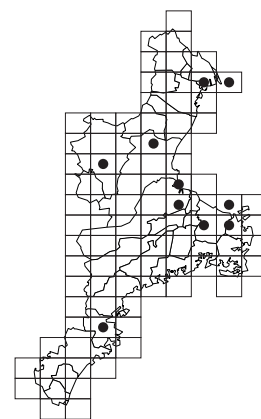
選定理由： 既知の生息地点は10程度であるが、個体数は少ない。生息地である開けた農耕地の改変が続いている。

種の概要： 冬鳥。体長28 cm (オス), 31 cm (メス)。翼開長61~66 cm。小鳥類を捕食するが、ネズミや昆虫なども狙う。開けた農耕地で越冬することが多い。地上でねぐらを取ることが知られている。コチョウゲンボウに似るが、やや小さく、羽色が異なる。コチョウゲンボウのようなひらひらとした飛び方をしない。

分布： 北半球に広く分布し、高緯度地域で繁殖し、冬は南へ渡り越冬する。

現況・減少要因： かつて木曾岬干拓地で大規模なねぐらが知られていたが、現在は極めて少ない。個体数はかなり少ないと推定される。木曾岬干拓地など各地の越冬地(開けた農耕地等)の保全が必要である。農耕の放棄により農耕地が改変されたり、宅地化され、また草原や草地は遊休地として太陽光発電が建設される例が多いが、本種の越冬に悪影響を与える。

保護対策： 開けた農耕地、草地を維持し、これ以上改変しない。



(平井正志)

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

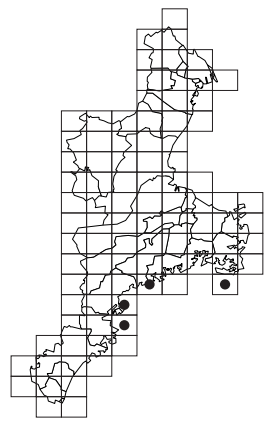
- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物

ウチャマセンニュウ スズメ目センニュウ科
Locustella pleskei

三重県：絶滅危惧IB類 (EN)
旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省：EN
近畿：要注目種

選定理由： 既知の生息地点は5以下である。繁殖する場所が離島だけであり、限られている。
種の概要： 夏鳥。体長16 cm。離島の灌木地、草むらで営巣し、昆虫類を捕食する。近縁のシマセンニュウとよく似ている。繁殖期には繁殖地で識別できるが、渡りの時期に野外で識別するのは困難である。捕獲すれば嘴の形状などで、区別が可能である。
分布： 日本列島、朝鮮半島、ロシア日本海岸の離島で繁殖する。冬は中国南部へ渡る。
現況・減少要因： 県内では志摩半島以南の無人の離島、和具大島、耳穴島、紀伊長島大島、尾鷲市寺島などで少数が繁殖する。
保護対策： 離島へのドブネズミなどの捕食者の侵入を防ぐ。繁殖地である離島の植生の変化を監視する。
特記事項： 県指定希少野生動物種。



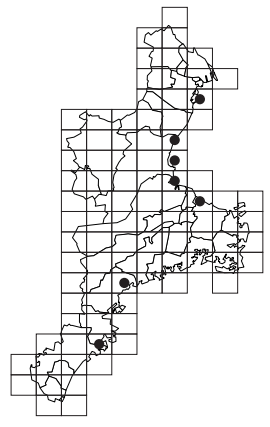
(平井正志)

コクガン カモ目カモ科
Branta bernicla

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：VU
近畿：—

選定理由： 既知の生息地点数が10以下で、50未満の個体数と考えられる。
種の概要： 冬鳥。全長約61 cm。上面黒色で、頸に不規則な白斑があり、下腹部から上・下尾筒は白い。おもに植物食で、干潟でアマモなどの海藻や底生生物を食べる。
分布： シベリア東部の北極圏で繁殖し、日本列島沿岸や黄海沿岸で越冬する。国内では、おもに北海道、東北地方に飛来し、西日本では少ない。
現況・減少要因： 四日市市鈴鹿川河口、津市安濃川河口干潟、松阪市雲出川、碧川、三渡川河口干潟、紀北町銚子川河口など数か所の干潟のいずれかで毎年数羽が越冬している。もともと渡来数は少ないが、港湾開発や海洋汚染の進展により減少する可能性がある。
保護対策： アマモ場、干潟などの現在の生息環境を保護することが必要である。藻場の破壊や沿岸流を変化させるような安易な干潟造成の防止、水質汚濁の防止対策を推進し、海藻が生育できる透明度の高い海を復元する必要がある。
特記事項： 国指定天然記念物。三重県で毎年越冬している唯一のガン類である。



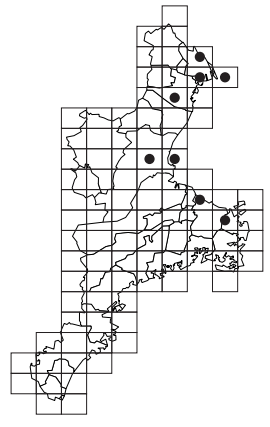
(武田恵世)

ササゴイ ペリカン目サギ科
Butorides striata

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—
近畿：NT

選定理由： 既知の生息地点数が10以下、出現範囲が400 km²以下、開発圧力がある。
種の概要： 夏鳥。全長約52 cm。成鳥は頭上は黒色。背と翼の上面は青緑色の光沢のある黒褐色で、下面は淡い紫灰色。大木や比較的高い樹林に小集団で営巣する。
分布： 熱帯から、温帯にかけて広く分布。国内では、本州、四国、九州で繁殖し、東南アジアで越冬する。九州南部では少数が越冬する。
現況・減少要因： 県内では、松阪市、伊勢市などの大木のある社寺林数か所で繁殖していたが、近年確実な繁殖記録はない。減少要因は、圃場整備や川や水路の改修による魚類、水生生物の激減。また、ブラックバスやブルーギルの違法・密放流で、おもな餌である小型の在来魚が激減した影響や、カラスによる繁殖妨害の影響が大きい。
保護対策： 集団営巣できる大木や樹林の保護およびカラスの個体数調整。河川工事は近自然工法で行い、「環境保全を重視する農林水産業への移行」政策に基づく農地の改良を実施し、魚類や水生生物が豊富な環境を復元することが必要である。



(武田恵世)

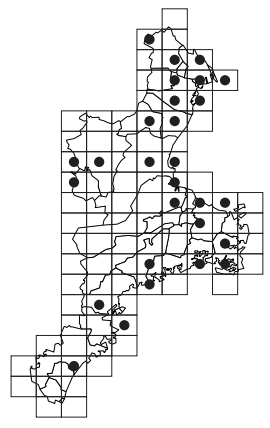
哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

チュウサギ *Egretta intermedia* ペリカン目サギ科

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：NT
近畿：NT

選定理由： 既知の生息（集団繁殖）地点数が10以下で、集団営巣地の適地が減少している。
種の概要： 夏鳥。一部越冬。体長約68.5 cm、コサギよりは大きく、ダイサギよりはかなり小さい。嘴の長さはコサギよりも短い。他のサギ類とともに集団営巣し、餌は魚介類や昆虫類。
分布： 熱帯から温帯に分布。国内では、本州から九州で繁殖。
現況・減少要因： 県内では、四日市市、伊賀市、鈴鹿市、津市、伊勢市などで繁殖し、ほぼ全域で生息。四日市市のコロニーは200羽程度で比較的大規模であり、伊賀市のコロニーでは50羽前後と少ない。減少要因は、圃場整備や河川工事による魚類、水生生物の激減や農薬の影響。ブラックバスやブルーギルの捕食圧による小型在来魚の激減、河畔林の激減などが生息環境の悪化を招いているためである。
保護対策： 集団営巣地やねぐらとなっている河畔林や池、海に隣接する水辺の森林を保護するとともに、悪臭などの人的被害が出ないような対策を立てる必要がある。また、近自然工法と「環境保全を重視する農林水産業への移行」政策の推進をはかる必要がある。
文献： 34.



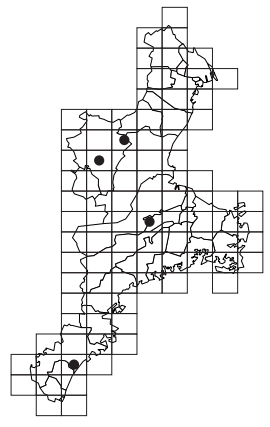
(武田恵世)

ミゾゴイ *Gorsachius goisagi* ペリカン目サギ科

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：情報不足 (DD)

環境省：VU
近畿：絶滅危惧

選定理由： 県内で繁殖していると考えられるが記録が少なく、全国的にも絶滅の危機が増大している。
種の概要： 全長49 cm、翼長25～29 cm、翼開張80～90 cm。頭部は濃赤褐色から黒褐色。体の上面は暗赤褐色。下面は淡褐色で赤褐色の縦筋がある。平地から低山帯の谷の上部の暗い森林の広葉樹の大木の樹上で繁殖し、魚類、昆虫類、サワガニ、ミミズなどを食べる。夜にボウ、ボウまたはコー、コーと聞こえる声で鳴くため夜行性と考えられていたが、昼行性との説もある。警戒すると体を伸ばして擬態する。
分布： 主に日本の本州以南で繁殖し、九州からフィリピンで越冬する。県内では、鈴鹿市、伊賀市、多気町、熊野市で記録がある。
現況・減少要因： 広葉樹林、特に溪畔林の減少。
保護対策： 広葉樹林、特に溪畔林の保護。



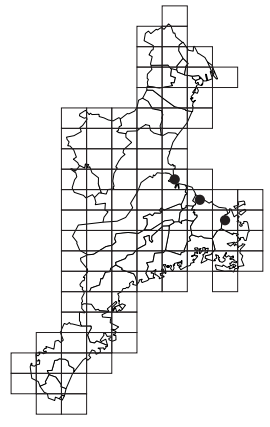
(武田恵世)

ナベヅル *Grus monacha* ツル目ツル科

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：—

環境省：VU
近畿：—

選定理由： 世界での推定個体数は12,000羽とされているが、その9割が九州の出水市に飛来し、越冬する。集中越冬地で、伝染病などのアウトブレイクが起これば、種自体の存続が危ぶまれる。近年、県中部の海岸部に少数が継続的に飛来するようになり、日本で分散して越冬することが本種の維持には欠かせないため、本県の越冬地は非常に重要である。
種の概要： 体は黒灰色で頭部と首は白い。目の上に赤斑がある。
分布： 九州の出水市、山口県などに飛来する。三重県では、松阪市から伊勢市にかけての海岸部の水田や湿地に飛来する。
現況・減少要因： 少数が一定地に留まり、越冬したり、海岸に近い水田を移動したりして越冬する。
保護対策： 飛来が確認されると、銃猟や人の立ち入りを制限するなどの措置が必要。ねぐらであるアシ原の保護も必要である。
文献： 29.



(前澤昭彦)

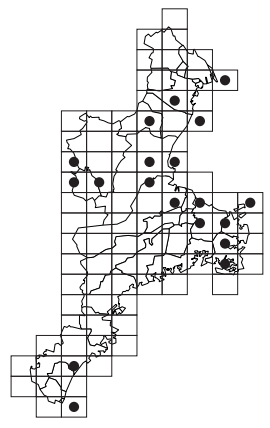
- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物

ヒクイナ ツル目クイナ科
Porzana fusca

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：NT
近畿：絶滅危惧

選定理由： 既知の生息地点数は20以下であり、生息地のアシ原、湿田などの生息地が減少している。
種の概要： 夏鳥。体長22.5 cm。体上面は褐色、顔、体下面が赤褐色である。繁殖期には「キョッキョッキョッキョ」の特徴ある声でなく、めったに飛び立たない。
分布： 日本全土で繁殖し、冬は南へ渡る。
現況・減少要因： 県内では四日市市、津市、伊賀市、松阪市、伊勢市、志摩市、熊野市などで記録があるが、個体数は少ない。主な生息地であるアシ原、湿地、湿田などが減少している。とくにアシ原は遊休地と見なされ、埋め立てられる場合が多い。また、河川改修で失われる場合がある。
保護対策： アシ原の減少を防ぐ。公共事業で河川敷などのアシ原を改変する場合には広さにかかわらず、鳥類の調査を義務付ける必要がある。失われた湿地を回復する事業が必要である。



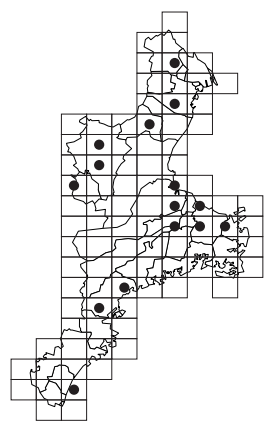
(平井正志)

イカルチドリ チドリ目チドリ科
Charadrius placidus

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧II類 (VU) (繁殖)
準絶滅危惧 (NT) (越冬)

環境省：—
近畿：NT

選定理由： 県内では比較的多く確認されているが、生息および繁殖に適した河原が減少している。
種の概要： 留鳥。体長20.5 cm。上面はうすい茶褐色で下面は白い。近縁のコチドリに似ているが、少し大きく目のまわりのリングが細い。おもな餌は水生生物である。河川の中流から上流の中洲や河原の砂礫地に営巣する。下流では少ない。
分布： ウスリー地方、中国東北地区、朝鮮半島などに分布。中国南部からミャンマーにかけて越冬する。国内では本州、四国、九州などで繁殖する。
現況・減少要因： 県内では、いなべ市、四日市市、鈴鹿市、伊賀市、名張市、松阪市、伊勢市、紀北町、紀宝町など各地の広い河原にごく少数生息している。冬期は越冬個体加わる。減少要因は広い河原や餌となる水生生物などの減少。また、営巣場所への人の立入りによる繁殖阻害などである。
保護対策： 井堰などを土砂が流れ出る構造に改修し、広い河原を確保する。また、営巣場所への人の立入りを制限することも必要である。
文献： 10. 38.



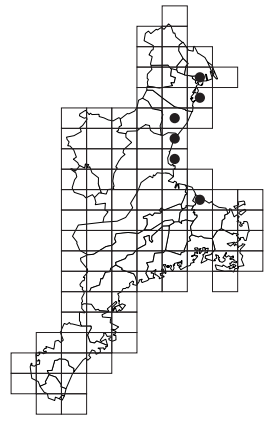
(武田恵世)

ミユビシギ チドリ目シギ科
Calidris alba

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—
近畿：絶滅危惧

選定理由： 生息地点は5程度であり、生息は砂浜海岸、河川の河口部に限られる。津市の豊津浦・町屋浦では東アジア飛行ルートの個体数22,000羽の1%にあたる220羽以上がほぼ毎年観察され、この飛行ルートの個体群を維持する上で重要な場所とされる。
種の概要： 全長19 cm。冬羽では背が明るい灰色、夏羽では顔から胸にかけて赤茶色の斑点が出る。砂浜海岸の波打ち際で甲殻類などを採餌する。
分布： 北半球全域に広く分布をする。日本に飛来する個体は東アジア飛行ルートに属し、シベリアタイミル半島周辺で繁殖する。日本での越冬もあるが、オーストラリアまで渡り、越冬するものが多い。日本での生息地は限られ、伊勢湾西海岸以外では千葉県九十九里浜で多くの個体が観察されている。
現況・減少要因： 三重県の個体数は年により変化するが、220羽以上が津市の海岸で観察される。顕著な減少傾向は示していない。
保護対策： 自然砂浜海岸を減少させない。また、海岸で休息する個体にむやみに近づかないよう周知する。
文献： 2.



(平井正志)

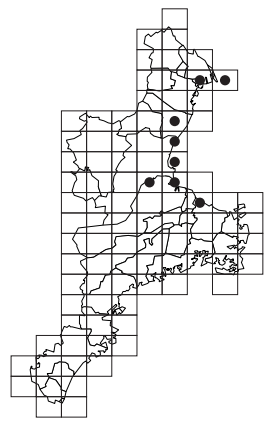
哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ダイシャクシギ *Numenius arquata* チドリ目シギ科

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—
近畿：絶滅危惧

選定理由： 既知の渡来地点数は10以下。干潟，砂浜に渡来するが，生息に適した環境が減少している。
種の概要： 旅鳥・冬鳥。体長61 cmでコサギとほぼ同じ大きさの大型のシギ。全身褐色の濃淡模様がある。くちばしが特に長く，下に湾曲している。カニ類を好んで食べる。
分布： ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯地域で繁殖し，冬は地中海沿岸，アフリカ大陸，ユーラシア南部に渡る。国内では，北海道，本州，四国，九州，沖縄に渡来する。2013年度における調査で，国内では，渡りの時期である春期で48羽，秋期で91羽，越冬個体としては376羽の生息が確認されている。
現況・減少要因： 北勢，中勢地域の干潟に渡来し，川越町，津市，松阪市，伊勢市などで確認されている。開発などにより生息環境が減少している。
保護対策： 干潟の保全と，生息地での人の利用制限区域の設定が必要である。
文献： 26. 32. 38.



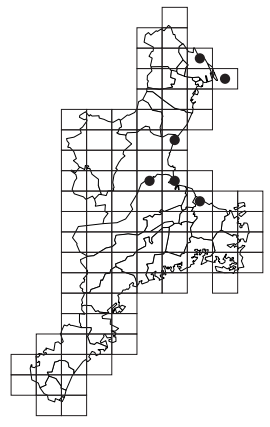
(前澤昭彦)

アカアシシギ *Tringa totanus* チドリ目シギ科

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：VU
近畿：絶滅危惧

選定理由： 既知の渡来地点数は5程度であり，個体数はごく少ない。
種の概要： 体長27.5 cm，秋と春に干潟，淡水の水路などに飛来する。近縁のツルシギに似るが，次列風切りが白く，飛ぶと識別できる。ツルシギは下嘴だけが赤いが，アカアシシギでは両方が赤くなる。
分布： ユーラシア大陸温帯で繁殖し，アフリカ，東南アジアで越冬する。日本では少数が北海道東部野付半島等の湿原で繁殖する。
現況・減少要因： 木曾岬町，津市，松阪市，伊勢市などで記録がある。松阪市五主海岸にはほぼ毎年記録されるが，2，3羽程度である。全国的にも飛来数は少ない。木曾岬町，伊勢市では近年記録がない。生息地の干潟，河口域での棲息環境の悪化が見られる。
保護対策： 干潟，河口部を改変しない。生息地の干潟周辺の水田を保全すべきである。



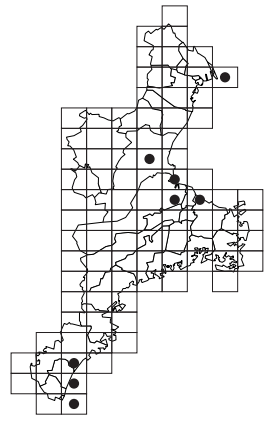
(平井正志)

コアオアシシギ *Tringa stagnatilis* チドリ目シギ科

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—
近畿：絶滅危惧

選定理由： 既知の渡来地点数は10以下。生息環境である湿地や養魚池などが，減少している。
種の概要： 旅鳥または冬鳥。体長24 cm。くちばしが細く，脚が非常に長い。夏羽では，頭上から背中と胸にかけて灰色で黒い斑点がある。腹部は白い。冬羽では，翼の上面は全体に灰色で，白い羽縁がある。「ピーピーピー」と鳴く。春秋の渡りの時期に干潟，水田，河原などに渡来する。
分布： ユーラシア大陸の温帯地域の内陸部でおもに繁殖し，アフリカ大陸からインド，東南アジアを経て，オーストラリア大陸にかけて越冬する。国内では，本州，九州，沖縄に春秋に渡来するが少ない。2013年度における調査では，国内では，渡りの時期である春期で46羽，秋期で27羽の生息が確認された。また冬期に越冬した個体は5羽であった。
現況・減少要因： 県内では，木曾岬町，松阪市，伊勢市の干潟，湿地，水田等で観察される。もともと渡来数は少ない。海岸周辺の湿地環境が減少していることがあげられる。
保護対策： 渡来地の湿地とその周辺環境を保全する。
文献： 26. 32. 38.



(前澤昭彦)

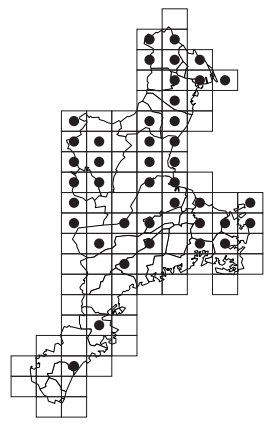
- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- EW
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

オオタカ タカ目タカ科
Accipiter gentilis

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
 旧県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：NT
 近畿：NT

選定理由： 県内には比較的広く分布するが、生息地への人為的圧力が極めて強い。
種の概要： 留鳥。体長50～60 cm, 翼開長105～130 cmとカラスより少し大きい。背面は暗青灰色で下面は黒と白の鷹斑模様で翼の幅が広く尾羽が長い。森林性で、餌はおもに小鳥類。樹高約10 m以上のアカマツ林に営巣することが多い。
分布： 北半球の中緯度地域に広く分布。国内では、北海道、本州、四国で繁殖し、秋冬には全国で見られる。
現況・減少要因： 県内では、桑名市、松阪市、伊賀市、南伊勢町、尾鷲市、御浜町はじめ全域に生息しており、繁殖期には20か所程度で確認されている。近年さらに減少傾向にあり、伊賀地方ではここ数年で半減している。冬期は北の地方から越冬個体が渡ってくるので個体数が増える。減少要因は、開発による生息地の消滅、営巣木となる大木や餌である鳥類等の減少、農薬の体内蓄積などと考えられている。
保護対策： 営巣木となる大木や、生息地となる広葉樹林やアカマツ林など鳥類の多い自然環境の保護、復元が必要である。
文献： 5. 33. 34.



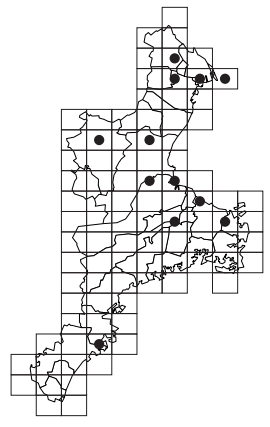
(武田恵世)

ハイロチュウヒ タカ目タカ科
Circus cyaneus

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
 旧県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—
 近畿：絶滅危惧

選定理由： 既知の生息地は10以下。生息地への開発圧が強い。
種の概要： 冬鳥。体長45～55 cm, 翼開長98～123 cm。カラス大のタカで、雄は翼の先が黒く、全身灰色で、下面は白い。雌と若鳥は淡褐色の地に黒褐色の縦斑がある。ゆっくりした羽ばたきと翼を浅いV字形に保った滑空を繰り返しながら飛び、ネズミ、小鳥類などの獲物を見つけるとすばやく地上に降りて捕まえる。
分布： ユーラシア大陸の亜寒帯や北アメリカ大陸で繁殖し、冬は南下する。国内では冬鳥として、全国の平地から山地草原、農耕地、河川、干拓地に飛来するが局地的である。
現況・減少要因： 県内では、木曾岬町、伊勢市、松阪市、桑名市などの海岸部で記録がある。安定した冬季の生息地である木曾岬干拓地のアシ原が開発で減少している。
保護対策： 河口や海岸付近および河川中流域のアシ原を保護し、採餌・ねぐら利用できる環境を作っていく。



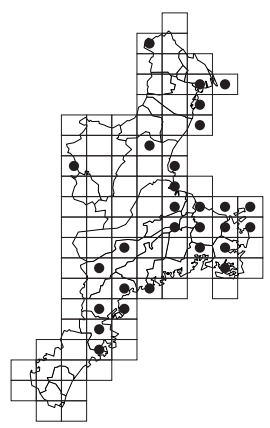
(前澤昭彦)

ミサゴ タカ目ミサゴ科
Pandion haliaetus

三重県：準絶滅危惧(NT)(繁殖)
 絶滅危惧II類(VU)(越冬)
 旧県：絶滅危惧IB類(EN)(繁殖)
 絶滅危惧II類(VU)(越冬)

環境省：NT
 近畿：絶滅危惧

選定理由： 繁殖期の既知の生息地点数は5以下、個体数は50未満。越冬期には広い範囲にみられるが、250未満の個体数しかいないと考えられる。
種の概要： おもに留鳥。冬期には越冬個体加わる。体長54～64 cm, 翼開長155～175 cm, 翼は細長く、尾は短い。頭部は白く過眼線が黒く、体の上面は黒褐色、下面は白く、胸に黒褐色の帯がある。雌雄同色。餌はおもに大型の魚類。海岸の孤立した岩の上や樹上などで営巣する。
分布： 極地を除く全世界に分布。国内では、北海道から沖縄で少数繁殖し、冬期には北のものは南に移動する。
現況・減少要因： 志摩半島以南で少数が繁殖していると考えられるが、近年確実な記録はない。冬期には、川越町から尾鷲市の海岸で確認されている。また、伊賀市の高山ダム湖など内陸部でもごく少数越冬している。減少要因は、魚類の減少、魚類を介した有害物質の体内蓄積や営巣可能な大木の減少などが考えられる。
保護対策： 海洋資源の持続的活用を進め、魚介類の減少を防止するとともに有害物質による環境汚染を防止する。また、営巣木となる大木を保護、育成する。
文献： 9. 21. 31. 40. 45.



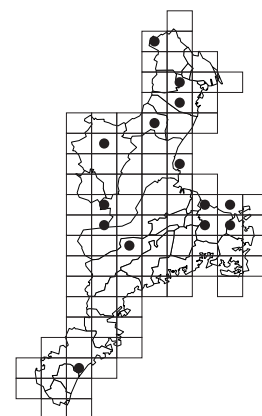
(武田恵世)

アオバズク フクロウ目フクロウ科
Ninox scutulata

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—
近畿：NT

選定理由： 既知の生息地点数は比較的多いが、営巣環境が悪化している。
種の概要： 夏鳥。体長29 cm、翼開長66～70 cm。中型のミミズクであるが、耳羽がない。褐色の頭と金色の目、下面は白地に褐色の太い縦斑がある。平地の林や神社の森等に生息し、樹洞に営巣する。夜間に活動し、セミやコガネムシ等の昆虫類、まれに小鳥やネズミを餌とすることもある。「ホッホッ、ホッホッ」と2音ずつ区切って鳴く。
分布： ユーラシア大陸東部のウスリーからインド、東南アジアで繁殖し、北部のものは、冬期、東南アジアに移動する。国内全域で繁殖し、沖縄では越冬もする。
現況・減少要因： 県内では、いなべ市、四日市市、鈴鹿市、亀山市、伊賀市、名張市、津市、松阪市、伊勢市、紀北町、熊野市など、ほぼ全域で記録があるが、営巣場所となる大木の減少により、繁殖が脅威にさらされている。また、カラス類により繁殖妨害も生じている。
保護対策： 神社や公園、河畔林などの大木を保護し、営巣場所を確保する。また、カラス類の個体数調整が必要である。
文献： 8. 16. 21. 31.



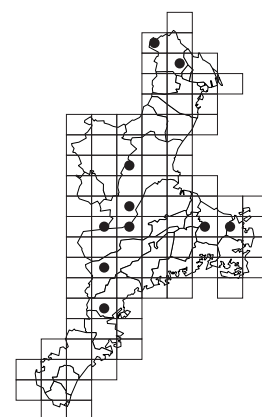
(前澤昭彦)

コノハズク フクロウ目フクロウ科
Otus sunia

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—
近畿：絶滅危惧

選定理由： 既知の生息地点数は10以下、営巣可能な樹洞のできる大木が減少している。
種の概要： 夏鳥。体長18.5～21.5 cm。大人の手のひらほどの大きさで、耳羽のある小型のミミズク。褐色の複雑な虫食い模様がある。「ブツ ポウ ソウ」と高い声で鳴く。大木のある自然林に好んで生息し、樹洞に営巣する。
分布： ユーラシア大陸南半、アフリカ、インドにかけて分布し、温帯地域で夏鳥として深山の森林に渡来する。
現況・減少要因： 県内では、いなべ市、桑名市、伊賀市、名張市、伊勢市、大台町などで記録がある。生息に適した自然林が減少したことが影響している。
保護対策： 営巣可能な樹洞のある大木を保存し、生息地の自然林を保護する必要がある。
文献： 36. 45.



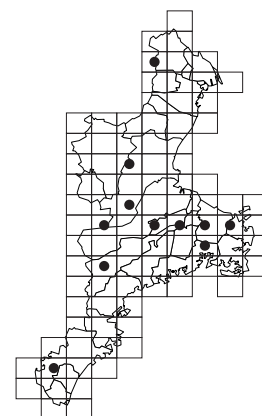
(前澤昭彦)

アカショウビン ブッポウソウ目カワセミ科
Halcyon coromanda

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—
近畿：絶滅危惧

選定理由： 既知の生息地点数は10程度である。
種の概要： 夏鳥。体長27.5 cm。全身明るい赤褐色で、腰に水色の部分がある。サワガニ、カエル、大型昆虫などを捕食する。樹洞に営巣し、ヒロロロロロと特徴のある声で鳴く。
分布： 国内は北海道から沖縄まで全国に分布する。奄美以南では個体数が多いが、本州では数が少ない。
現況・減少要因： 県下ではいなべ市、津市、伊勢市、鳥羽市などで記録がある。溪流に沿った林が林道工事、砂防工事などで失われる場合がある。また、営巣できる樹洞を持つ木が不要な木として伐採される場合がある。また、近年県内で野鳥撮影者が巣の周辺にいたことによる繁殖放棄例がある。
保護対策： 溪流周辺の植生、樹林を保護すべきである。写真撮影においては適切なマナーを守って撮影すべきである。



(平井正志)

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU**
- NT
- DD

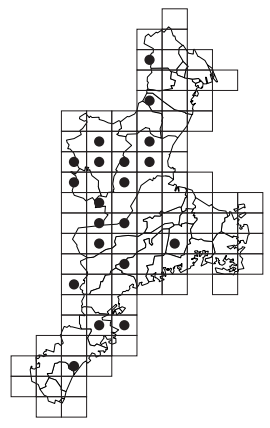
- 哺乳類
- 鳥類**
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- EW
- EW
- CR
- EN
- VU**
- NT
- DD

オオアカゲラ キツツキ目キツツキ科
Dendrocopos leucotos

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—
近畿：NT

選定理由： 既知の生息地点数は多いが、個体数は少ない。近年の広葉樹林の減少とともに、減少傾向にある。
種の概要： 留鳥。一年を通じてほとんど移動しない。体長28 cmであり、近縁のアカゲラに似るがやや大きく、下面に黒い縦斑があること、背面の白斑の模様が異なることで識別できる。
分布： 国内では奄美大島以北に分布する。広葉樹林を好む。
現況・減少要因： 個体数は少なく、生息地点が限られている。山地、河畔林、社寺林などの営巣可能な大木のある場所に生息している。キツツキ類はスギ・ヒノキの植林地で見るとは稀である。
保護対策： 落葉広葉樹林を拡大し、大木を保護する。



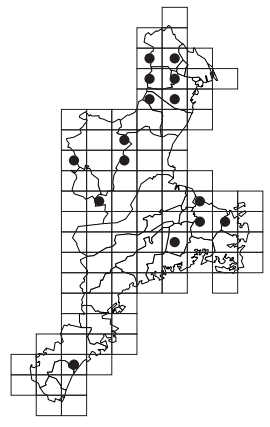
(平井正志)

サンショウクイ スズメ目サンショウクイ科
Pericrocotus divaricatus

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：VU
近畿：NT

選定理由： 生息地点は15程度である。本州以南に飛来し、繁殖する夏鳥であるが、全国的に減少が著しい種である。
種の概要： 夏鳥。全長20 cm。体は細く、後頭部、翼、尾は黒く、背、上尾筒は青灰色、下面、額は白い。森林の樹冠の上部で生活し、昆虫などを捕食する。
分布： 日本、朝鮮半島、ロシア沿海地方、中国東北部などで繁殖し、フィリピン、ボルネオ、中国南部、インドシナ半島で越冬する。沖縄では越冬する。
現況・減少要因： 近年の全国的減少の原因は不明。天然林の減少、スギ・ヒノキ人工林の増加が減少要因の一つであろう。越冬地での状態はあまり知られていない。越冬地や渡り途中での減少要因も考えられる。県内での繁殖状況は不明である。
保護対策： 現在知られている生息地の現状を維持する。自然林を拡大する。
文献： 12, 20, 44.



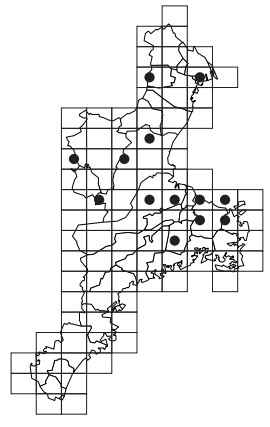
(平井正志)

キクイタダキ スズメ目キクイタダキ科
Regulus regulus

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省：—
近畿：NT

選定理由： 生息地点数は10程度である。冬鳥で年により飛来数に大きな変化があり、恒常的に見られる場所は少ない。
種の概要： 冬鳥。体長10 cm。ごく小さく、頭に黄色と赤の冠羽があるので容易に識別できる。モミなどの針葉樹林を好むが、針広混交林にも現われる。昆虫の幼虫など枝葉に潜む小動物を捕食する。
分布： ユーラシア大陸北部で繁殖する。日本では、北アルプス、南アルプス、富士山周辺、北海道大雪山周辺で繁殖し、冬は標高の低い森林に降りる。
現況・減少要因： 三重県内では時々みられるが、個体数は少ない。2012～2013年の冬には各地で比較的良好に見られたが、2013～2014年の冬には観察されていない。天然林の減少、スギ・ヒノキ林への単一化が問題であろう。
保護対策： 単一の樹種でない森林を増加させる。



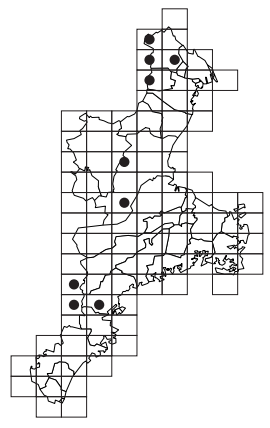
(平井正志)

コルリ *Luscinia cyane* スズメ目ヒタキ科

三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省：—
近畿：NT

選定理由： 既知の生息地は10以下である。生息環境である落葉広葉樹林とその林床に変化が見られる。
種の概要： 夏鳥。体長14 cm。オスは上面が暗青色、下面が白色、メスは上面がオリーブグリーン。広葉樹林の低木層の茂みに棲み、姿を見ることは難しい。繁殖期は主に昆虫を食べる。
分布： 日本、ロシアアムール川流域、バイカル湖周辺、モンゴル北部などで繁殖し、冬はインドシナ半島、スマトラ、ボルネオ等で越冬する。日本の中部地方では主に標高の高い場所で繁殖する。
現況・減少要因： 県内では鈴鹿山脈、津市美杉町、大台町など標高の高い場所の広葉樹林、林縁で観察され、繁殖していると推定される。スギ・ヒノキの人工林には生息しない。もともと生息数は多くない。近年ニホンジカの食害で、林内の低層植生が失われている場所が多く、減少原因のひとつであろうと懸念される。
保護対策： ニホンジカの食害を防ぐ必要がある。生息地である広葉樹林は改変すべきでなく、むしろ拡大すべきである。



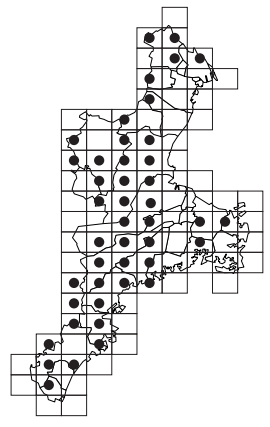
(平井正志)

ヤマドリ *Syrnaticus soemmerringii* キジ目キジ科

三重県：準絶滅危惧 (NT)
旧県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—
近畿：—

選定理由： 県内に広く分布し確認記録も多いが、自然林の減少や人工林化により生息環境が悪化してきている。
種の概要： 留鳥。体長125 cm、翼開長81 cm。キジと同じくらいの大きさで、全身に赤褐色の斑紋を持つ。尾はキジより長く、赤と黒の横帯が並ぶ。雌は全体に淡い褐色。よく茂った自然林で、地上の草の種子や果物、昆虫などを食べる。地上に巣を作る。
分布： 日本固有種。国内では、本州から九州のよく茂った山地に生息する。
現況・減少要因： 県内ではほぼ全域にわたって記録があるが、生息適地である自然林の減少と狩猟圧により個体数は減少している。なお、1976年から雌は狩猟対象から外されているが、雄への狩猟圧は高い。
保護対策： 雄も狩猟対象から除外する法的対策が必要である。また、現存の広葉樹林を積極的に保護するとともに、放置されて利用されていない人工林は広葉樹林への転換をはかる。
文献： 21, 31, 37.



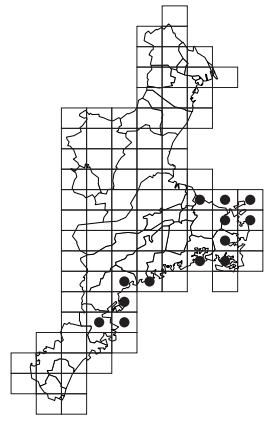
(前澤昭彦)

クロサギ *Egretta sacra* ペリカン目サギ科

三重県：準絶滅危惧 (NT)
旧県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—
近畿：NT

選定理由： 既知の生息地点数はおよそ20か所。50未満の個体数しかない。
種の概要： 留鳥。全長約63 cm。嘴は太くて長く、足は比較的短い中形のサギ。黒色型と白色型があるが、九州から本州には黒色型が多く、南西諸島以南は白色型が多い。岩礁海岸に生息し、磯の波打ち際で魚、エビ、カニ、貝類などを捕食する。繁殖期は5~6月で断崖の岩の隙間に小枝を運び込んで巣をつくる。近年、全国的に減少傾向にある。
分布： 東南アジアからオーストラリアにかけて広く分布する。国内では、本州以南では留鳥として分布し、東北地方以北、北海道では夏鳥である。
現況・減少要因： 県内では、鳥羽市、紀北町の離島で繁殖記録があるが、現況は未確認。非繁殖期には、志摩半島から熊野灘沿岸にかけて生息する。繁殖環境や餌資源の減少が減少要因となる。
保護対策： 繁殖状況の確認が急務である。また、岩礁海岸や島嶼の現在の生息環境を保護し、海洋資源の持続的活用を進め、魚介類の減少を防止する必要がある。
文献： 9, 21.



(武田恵世)

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物

EW
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ヨシゴイ ペリカン目サギ科 三重県：準絶滅危惧 (NT)
Ixobrychus sinensis 旧県：情報不足 (DD)

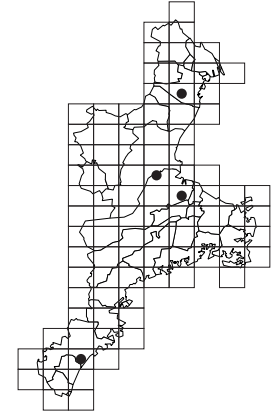
選定理由： 県内で繁殖していると考えられるが記録が少なく、全国的にも生息環境が減少している。

種の概要： 全長31～38 cm、翼開張53 cm。上面は褐色、下面は淡黄色翼は淡褐色で、後が黒い。虹彩は黄色。嘴は橙色。水上のアシなどの植物を束ねた巣を作り、警戒すると体を伸ばして草に擬態する。

分布： インドから東南アジア、日本、中国東北部、ロシアに生息し、日本のより北のものは、冬期は南に渡る。日本では主に夏鳥で、九州以北で繁殖する。本州中部以南では越冬例もある。県内では、桑名市、四日市市、松阪市、多気町、御浜町で記録がある。

現況・減少要因： 護岸工事などによるアシ原など水辺の植物の減少。
保護対策： アシ原など水辺の植物の保護。

環境省：NT
近畿：絶滅危惧



(武田恵世)

クイナ ツル目クイナ科 三重県：準絶滅危惧 (NT)
Rallus aquaticus 旧県：準絶滅危惧 (NT)

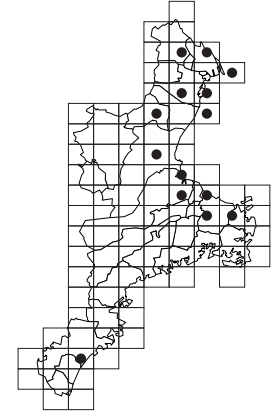
選定理由： 既知の生息地点数は15程度である。単独行動し、個体数は少ない。生息環境は人間の活動域に近く、悪化している。

種の概要： 体長29 cm。背は褐色で黒い縦斑があり、下面の脇と下尾筒は白地に黒い横斑がある。嘴の基部は赤い。湿地に生息する。足は速いが、めったに飛び立たない。三重県では冬鳥であり、繁殖の記録はない。平地のアシ原、水辺の草むらに棲む。警戒心が強く、なかなか姿を見せない。

分布： ユーラシア大陸、北アフリカに生息する。国内では北海道、本州北部で繁殖するが、その他の地域では冬鳥と考えられている。

現況・減少要因： 平地のアシ原、湿地、水辺の草むらが種々の理由で改変され、消滅するなど、生息環境の悪化が減少の主要要因であろう。
保護対策： 平地のアシ原、湿地、水辺の草むらを改変しない。

環境省：—
近畿：NT



(平井正志)

コチドリ チドリ目チドリ科 三重県：準絶滅危惧 (NT)
Charadrius dubius 旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

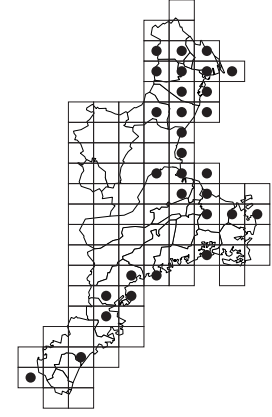
選定理由： 既知の生息地点数は20か所程度である。生殖環境、繁殖地が不安定である。
種の概要： 主に夏鳥。体長16 cm。イカルチドリに似るが、やや小さく、顔の模様がやや異なる。

分布： 広くユーラシア大陸とその周辺部に生息、日本では全国で繁殖する。冬は南へ渡るものがある。

現況・減少要因： 県内各地の河川の中下流の砂礫地で繁殖する。また、土置場など人口の裸地でもよく繁殖が見られる。河川の砂礫地がアシなどの繁茂で減少している。これはダムにより水量が調節され、大量の水と土砂が流れることがなくなったためである。また、河川が直線化され、砂礫の堆積する場が減少している。高度成長期には工場建設、公共事業などで多量に人工の裸地が減っている。

保護対策： ダムの影響で大雨の時でも大量の水が河川に流れないため、砂礫地が減っている。ダムや井堰のフラッシュ放流、土砂放流など、河川の砂礫地を維持する対策が必要である。河川の砂礫の堆積する場所を減らさないかあるいは砂礫堆積場所を創出する。

環境省：—
近畿：NT



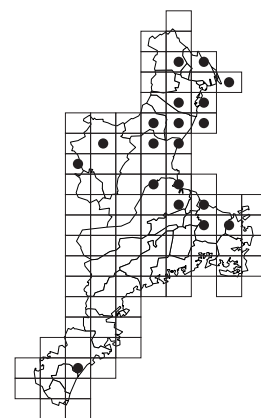
(平井正志)

タゲリ *Vanellus vanellus*
チドリ目チドリ科

三重県：準絶滅危惧 (NT)
旧県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—
近畿：NT

選定理由： 生息地点は20か所程度である。県内では比較的多く確認されているが、生息環境の悪化が見られる。
種の概要： 冬鳥。体長31.5 cm。体上面と翼は金属光沢を持つ、緑色である。頭部に換羽がある。休耕田、水田、河川に飛来し、地上の小動物を食べる。
分布： ユーラシア大陸温帯、亜寒帯で繁殖し、冬は南へ渡る。
現況・減少要因： 県内では伊勢平野各地、伊賀地方、熊野市で記録されている。数羽から十数羽の群が多く、数は多くない。水田の耕作方法が変化し、乾田化し、餌となる小動物が冬に少なくなったことが減少の原因であろう。
保護対策： 水田の冬季湛水などを推進して、餌動物を増やす。



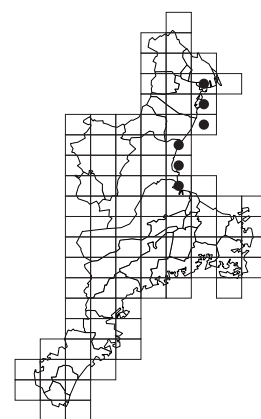
(平井正志)

ミヤコドリ *Haematopus ostralegus*
チドリ目ミヤコドリ科

三重県：準絶滅危惧 (NT)
旧県：—

環境省：—
近畿：—

選定理由： 生息地点は10以下である。東アジア飛行ルートのみやこドリは10,000羽と推定され、三重県に生息・越冬する個体数はその約1%であり、生息地は貴重である。
種の概要： 45 cm。白と黒の羽色の大型のシギであり、嘴と足のオレンジ色がめだつ。干潟や砂浜海岸に生息し、主として二枚貝を食べる。
分布： ユーラシア大陸に広く分布する。分布域ごとに渡りのルートが異なり、別亜種、別個体群として認識されている。東アジア飛行ルートのみやこドリはカムチャッカ半島、および韓国西岸、中国渤海湾沿岸の島嶼で繁殖する。
現況・減少要因： 日本での越冬数は500羽内外である。三重では近年毎冬60羽から100羽程度が越冬する。観察される場所は安濃川河口周辺が最も多く、その他北勢から松阪市の海岸の河口付近にも飛来する。越冬する個体もあり、主に繁殖に参加しない若年個体と思われる。
保護対策： 河口周辺、自然砂浜海岸をこれ以上改変しない。海岸で採餌する個体は人の接近に敏感である。貴重な鳥であり、むやみに近づかないよう海岸を利用する人々に周知することが大切である。
文献： 2, 24, 28.



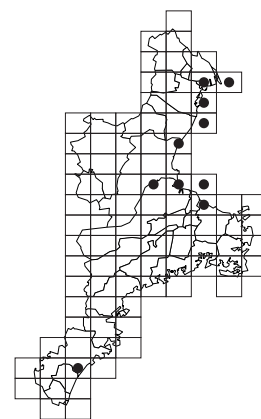
(平井正志)

ホウロクシギ *Numenius madagascariensis*
チドリ目シギ科

三重県：準絶滅危惧 (NT)
旧県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：VU
近畿：絶滅危惧

選定理由： 既知の渡来地点数10以下で、生息地では、特に春の渡りの時期に海浜でのレジャーなどで人が立ち入り、生息に脅威を与えている。
種の概要： 旅鳥。体長63 cmでコサギとほぼ同じ大きさの大型シギ。姿はダイシャクシギに似るが、体全体の色合いはダイシャクシギよりも濃い。
分布： カムチャッカ半島、東北シベリア、中国東北地区などで繁殖し、東南アジア、オーストラリアなどで越冬する。国内では、旅鳥または冬鳥として全国に渡来する。
現況・減少要因： 2013年度における全国調査では、渡りの時期である春期で79羽、秋期で81羽の生息が確認されているだけである。県内では木曾岬町、川越町、桑名市、四日市市、松阪市、伊勢市、御浜町などの干潟や水田付近に記録がある。減少要因は、生息場所である干潟が減少傾向にあり、レジャーなどによる生息地への人の立ち入りが多くなったことがあげられる。
保護対策： 干潟の保全と開発防止。また、人の利用制限区域の設定が必要である。特に、干潟の大規模な変化をもたらす工事等を行わないこと。
文献： 8, 26, 32.



(前澤昭彦)

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

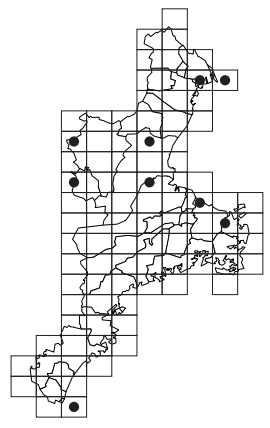
哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物

タマシギ チドリ目タマシギ科
Rostratula benghalensis

三重県：準絶滅危惧 (NT)
旧県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：VU
近畿：—

選定理由： 既知の生息地点数は比較的多いが、生息環境である湿原等での開発や、自然遷移が進み、生息地が減少している。
種の概要： 全鳥体長23 cmの中型のシギ。オスは喉から胸が灰褐色で、翼の上面に白い斑がある。抱卵、育雛の全てを雄が行う。休耕田などの草の生えた湿地に生息し、昆虫やミミズ、草の実などを食べる。
分布： アフリカ、アジア、オーストラリアの温帯から熱帯で繁殖する。国内では本州中部から九州、沖縄にかけて繁殖する。
現況・減少要因： 2013年度における全国調査では、県内で春期に2羽、秋期に12羽の生息が確認されているだけである。県内では、木曾岬町、四日市市、津市、伊賀市、松阪市、伊勢市などに記録がある。放置水田等の自然遷移の進行などで生息環境は悪化している。
保護対策： 生息地である湿地を保護する。放置水田を非繁殖期に耕し、遷移の進行を抑える。また、農耕地では化学肥料や農薬を減らし、本種の餌資源を増やす。
文献： 26.



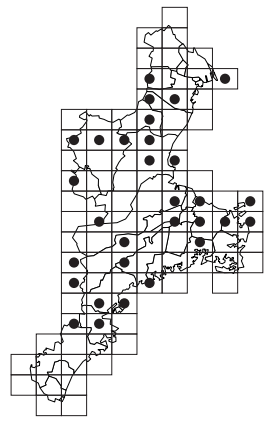
(前澤昭彦)

ハイタカ タカ目タカ科
Accipiter nisus

三重県：準絶滅危惧 (NT)
旧県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：NT
近畿：要注目種

選定理由： 既知の生息地点数はおよそ30か所、生息環境は悪化している。
種の概要： 冬鳥。体長31.9~39 cm、翼開長100~130 cm。オオタカより小型で、眉斑が細いことで区別できる。森林性で、高木の樹上に営巣する。小鳥類がおもな餌である。全国的に減少が著しい。
分布： 北半球の中緯度地域に広く分布。国内では本州中部以北で繁殖し、渡りの時期の春秋と冬期には全国で見られる。
現況・減少要因： 県内では、冬期にはほぼ全域で少数が見られる。青山高原では、繁殖期である4月の確認もあるが、確実な繁殖は県内では確認されていない。減少要因は、戦後の拡大造林政策や開発によりアカマツ林や広葉樹林が減少したこと、餌である小鳥類が減少したこと、農薬の体内蓄積などと考えられている。
保護対策： アカマツ林や広葉樹林など小鳥類の多い自然環境を保護、復元すること。また、放棄されて木材としては役に立たない状態となっているスギ、ヒノキ人工林は広葉樹林に転換する必要がある。
文献： 23. 33. 34. 45.



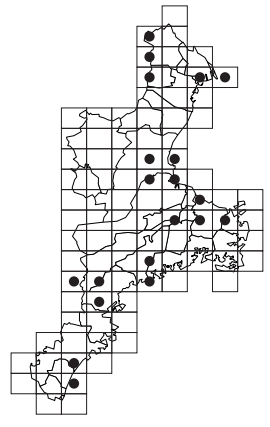
(武田恵世)

コミズク フクロウ目フクロウ科
Asio flammeus

三重県：準絶滅危惧 (NT)
旧県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—
近畿：絶滅危惧

選定理由： 既知の生息地点数はおよそ20か所、生息環境の悪化が著しい。
種の概要： 冬鳥。体長37~39 cm、翼開長95~110 cm。地上性のミミズクで、平地から、農耕地、河原、埋め立て地などに飛来する。フクロウ類のなかでは珍しく、昼間も比較的活動する。ネズミなどを捕食し、ねぐらを地上でとる。
分布： ユーラシア大陸、北アメリカ大陸の寒帯、亜寒帯地域で繁殖し、冬はヨーロッパ南部、北アフリカへ、アジアではインドから日本にかけて移動する。国内では、冬鳥としてほぼ全国的に渡来するが、少ない。
現況・減少要因： 県内では、木曾岬町、伊賀市、松阪市、伊勢市、大紀町、熊野市などのアシ原や草地、開けた農耕地などで記録がある。アシ原等が減少し、さらに餌となる小動物も減少している。
保護対策： 河川や河口部のアシ原草地などの環境保全に努める。
文献： 8. 29.



(前澤昭彦)

フクロウ

フクロウ目フクロウ科

三重県：準絶滅危惧 (NT)

旧県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—

近畿：NT

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

選定理由： 既知の生息地点数は比較的多いが、営巣環境の悪化が著しい。

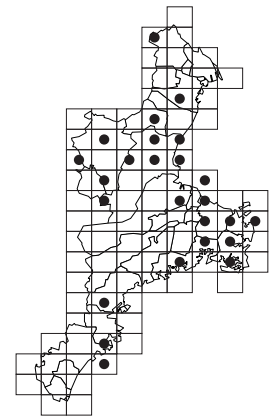
種の概要： 留鳥。体長約50 cm, 翼開長94~102 cm。夜行性で、おもに森林に生息。「ホッホ ホッホ」という太い声で繰り返し鳴く。

分布： ユーラシア大陸の温帯、亜寒帯地域に広く分布。国内では九州以北で繁殖している。

現況・減少要因： 県内では、いなべ市、四日市市、鈴鹿市、津市、松阪市、伊賀市、名張市、伊勢市、鳥羽市、紀北町、熊野市、御浜町などで確認されている。減少要因は、営巣可能な大木が減少していること。餌となる小動物の減少も原因と考えられる。近年、切り株などの地上に営巣する事例もあり、樹洞のあるような大木の営巣木の不足は本種の個体数維持に深刻。

保護対策： 営巣可能な樹洞ができるような大木の保護。広葉樹林や採食地である周辺の農耕地を含めた里山環境の保全が必要である。

文献： 23, 31, 45.



(前澤昭彦)

ヤマセミ

ブッポウソウ目カワセミ科

三重県：準絶滅危惧 (NT)

旧県：—

環境省：—

近畿：NT

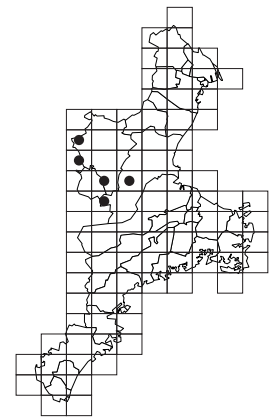
選定理由： 目立つ種類で目立つ場所に生息しているにもかかわらず記録が非常に少なく、生息地である河川環境の悪化が見られる。

種の概要： 体長約38 cm。翼開長約67 cm。日本のカワセミ科の鳥では最大の種類である。頭には大きな冠羽があり、からだの背中側が白黒の細かいまだら模様になっているのが特徴。腹側は白いが、あごと胸にもまだら模様が帯のように走っている。オスとメスはよく似るが、オスはあごと胸の帯にうすい褐色が混じる。

分布： アフガニスタン北東部からヒマラヤ、インドシナ半島北部、中国中部以南、日本に分布。日本では、留鳥として九州以北に分布。

現況・減少要因： 三重県では繁殖記録はほとんどなく、伊賀地方では繁殖期には1つがい、越冬期には例年4~5羽が確認されている。水質の良い上流域に少数見られ、越冬期はやや数が増える。

保護対策： 河川の水質浄化、土の崖の保護、河川のかく乱や山地の地形変化のある程度の許容。



(武田恵世)

サンコウチョウ

スズメ目カササギヒタキ科

三重県：準絶滅危惧 (NT)

旧県：—

環境省：—

近畿：NT

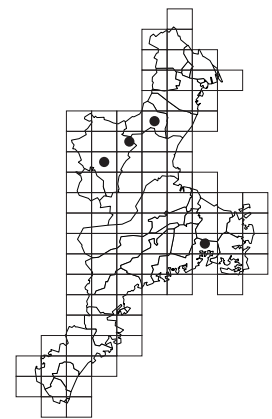
選定理由： 既知の生息地点数が100以下で、減少傾向にあるため。

種の概要： 全長は雄が約45 cm (繁殖期)、雌が17.5 cm。繁殖期のオスは、体長の3倍ぐらいの長い尾羽をもつ。羽色は、顔面部が黒紫色、腹部は濁白色、背面はやや赤みのある黒紫色、その他の部分は暗黒紫色で、アイリングと嘴は明るい水色である。メスは、オスの色彩とほぼ同色であるが、オスと比較してアイリングと嘴の水色は不明瞭で、背部と尾部は赤みの強い赤褐色。尾羽は体長と同じくらい。

分布： 日本、台湾、フィリピンに分布。日本では夏鳥。

現況・減少要因： 伊賀地方では繁殖期の記録が4か所から2か所に減少している。県内全体でも減少傾向にあると考えられる。

保護対策： 広葉樹林、特に照葉樹林の保護。



(武田恵世)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

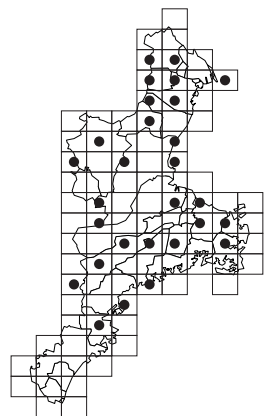
- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- EW
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

センダイムシクイ スズメ目ムシクイ科
Phylloscopus coronatus

三重県：準絶滅危惧 (NT)
旧県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：
近畿：NT(繁殖個体群)

選定理由： 既知の生息地点数は多いが、渡り途中での観察例が多いものと考えられる。生息、繁殖環境が悪化している。確実な繁殖確認例は少ない。
種の概要： 体長12.5 cm。体の上面は暗い黄緑色、下面は白い。白い眉斑と頭中央線が目立つ。夏鳥として比較的低山の落葉広葉樹林に生息し、樹冠内で昆虫類を採餌する。
分布： 日本、朝鮮半島、中国東北部で繁殖し、冬は中国南部からインドシナ半島、スマトラで越冬する。
現況・減少要因： 県内では山地と山麓で広く観察される。しかし、渡り途中でもよく囀るため、渡りの時期の観察も多い。県内での繁殖状況はよく把握されていない。スギ・ヒノキ人工林の拡大、落葉広葉樹林の減少に伴い、減少傾向にあると推定される。
保護対策： 広葉樹林の保全、放棄人工林の広葉樹林への転換を図る。ニホンジカの食害を防ぐ。



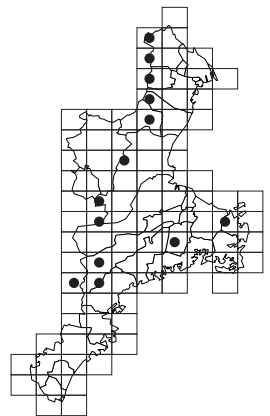
(平井正志)

コマドリ スズメ目ヒタキ科
Luscinia akahige

三重県：準絶滅危惧 (NT)
旧県：情報不足 (DD)

環境省：
近畿：NT(繁殖個体群)

選定理由： 既知の生息地は10程度である。生息環境である山地の落葉広葉樹林とその林床の茂みに変化が見られる。
種の概要： 全長14 cm。夏鳥。雄は頭部から胸が赤褐色、胸の下部は暗灰色、背と尾もやや鈍い赤褐色。雌も雄に似るが全体に色が鈍い。標高の高い落葉広葉樹林下の藪に生息し、めったに姿を現さない。雄は大きな特徴のある声でさえずる。
分布： 九州以北で繁殖し、冬は中国南部などに渡る。
現況・減少要因： 鈴鹿山脈、台高山脈など標高の高い広葉樹林で繁殖する。高見山地やその南側の標高の高い山地でも記録されている。渡り途中では標高の低い場所でも記録される。伊勢周辺の記録は古いものであり、渡り途中での記録と思われる。落葉広葉樹林の減少、ニホンジカによる植生の変化、特に下生えの減少などで、生息環境が奪われている。個体数は減少傾向にあると推定される。
保護対策： 標高の高い山地における落葉広葉樹林の再生、植生の復活を図る。ニホンジカの食害を防ぐ。



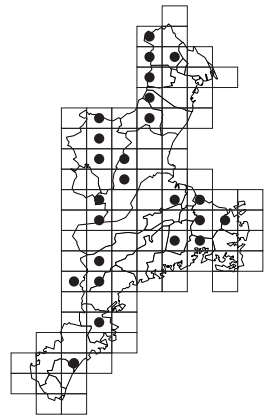
(平井正志)

キビタキ スズメ目ヒタキ科
Ficedula narcissina

三重県：準絶滅危惧 (NT)
旧県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：
近畿：NT(繁殖個体群)

選定理由： 生息地点数は比較的多いが、生息環境が悪化している。
種の概要： 体長13.5 cm。夏鳥。雄は体上面、翼が黒く翼に白斑があり、腰、喉、胸が明るいオレンジ色である。雌は暗い緑味を帯びた褐色。尾は赤味を帯びた褐色。落葉広葉樹林に生息し、樹冠内で空中の昆虫、蜘蛛などを捕食する。そのため、生息には密生した林でなく、樹冠内に広い空間をもつ林が必要である。
分布： 南千島から日本全国で繁殖し、冬はインドシナ半島、フィリピン、ボルネオなどへ渡る。南西諸島では越冬する。
現況・減少要因： 県内では山地と山麓に広く分布している。スギ・ヒノキ人工林の増加、枝打ち、間伐の放棄、広葉樹林の減少により、生息環境が悪化している。
保護対策： 広葉樹林の保全、放棄人工林の広葉樹林への転換を図る。ニホンジカの食害を防ぐ。



(平井正志)

クロツグミ <i>Turdus cardis</i>	スズメ目ヒタキ科	三重県：準絶滅危惧 (NT) 旧県：準絶滅危惧 (NT)	環境省： 近畿：NT(繁殖個体群)
--------------------------------------	----------	---------------------------------	----------------------

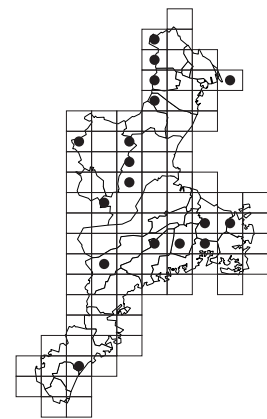
選定理由： 生息地点は15程度であり、比較的多いが、生息環境の悪化により減少傾向にある。

種の概要： 体長21.5 cm、ツグミよりやや小さく、雄は頭、背、翼が黒く、胸は白く黒斑がある。雌は赤褐色である。雄は高木の梢でさえずる。地上でミミズなどを食べる。

分布： 九州以北の山地に夏鳥として飛来し、繁殖する。冬は中国南部からインドシナ半島で越冬する。

現況・減少要因： 県内では鈴鹿山脈、布引山地、高見山地から台高山脈系など広くに分布する。しかし、広葉樹林の消失に伴い、減少傾向にあると考えられる。また、ニホンジカの食害による、低木層、林床植生の喪失による環境変化も懸念される。

保護対策： 広葉樹林の保全、放棄人工林の広葉樹林への転換を図る。ニホンジカの食害を防ぐ。



(平井正志)

ウズラ <i>Coturnix japonica</i>	キジ目キジ科	三重県：情報不足 (DD) 旧県：情報不足 (DD)	環境省：VU 近畿：危機的絶滅危惧
--	--------	-------------------------------	----------------------

四日市、津、伊勢、紀北町の記録は1950年代のものである。近年は、桑名、御浜町などで観察されている。
(平井正志)

ヨタカ <i>Caprimulgus indicus</i>	ヨタカ目ヨタカ科	三重県：情報不足 (DD) 旧県：情報不足 (DD)	環境省：NT 近畿：絶滅危惧
--	----------	-------------------------------	-------------------

広く県内各地の山地に生息する夏鳥。夜行性で、目立たない羽色のため、生息状況が十分に把握されていない。
(平井正志)

オジロトウネン <i>Calidris temminckii</i>	チドリ目シギ科	三重県：情報不足 (DD) 旧県：情報不足 (DD)	環境省： 近畿：絶滅危惧
--	---------	-------------------------------	-----------------

旅鳥。冬鳥として渡来し、越冬地は松阪市中村川中流、松阪市喜多村新田、および御浜町下市木などであり、いずれも安定した越冬地とは言えない。
(平井正志)

オオジシギ <i>Gallinago hardwickii</i>	チドリ目シギ科	三重県：情報不足 (DD) 旧県：DD	環境省：NT 近畿：NT
---	---------	------------------------	-----------------

春秋の渡りの時期に県下の水田や湿地に渡来する。他のジシギ類との識別は難しいが、2013年に松阪市や紀宝町に飛来した明らかに本種と思われる個体が確認されている。
(前澤昭彦)

オオコノハズク <i>Otus lempiji</i>	フクロウ目フクロウ科	三重県：情報不足 (DD) 旧県：DD	環境省： 近畿：絶滅危惧
---------------------------------------	------------	------------------------	-----------------

留鳥。大人の手のひらより少し小さめのフクロウ。津市、伊賀市などで記録がある。青山高原で繁殖期に標識調査中に雌雄が捕獲されたことがある。
(前澤昭彦)

ブッポウソウ <i>Eurystomus orientalis</i>	ブッポウソウ目ブッポウソウ科	三重県：情報不足 (DD) 旧県：情報不足 (DD)	環境省：EN 近畿：危機的絶滅危惧
---	----------------	-------------------------------	----------------------

夏鳥。大杉谷、三重大学演習林での記録は1950年代のものである。近年、菰野町県民の森、桑名市で観察例があるが、渡り途中の可能性もあり、近年の生息状況は不明。
(平井正志)

- 哺乳類
- 鳥類**
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT**
- DD**

コサメビタキ <i>Muscicapa dauurica</i>	スズメ目ヒタキ科	三重県：情報不足 (DD) 旧県：情報不足 (DD)	環境省：— 近畿：—
--	----------	-------------------------------	---------------

広く県内各地の山地で観察されている。個体数は多くなく、渡り途中の通過個体が多いと思われる。繁殖状況はよくわかっていない。

(平井正志)

文 献

1. 安藤宣朗. 2008. 三重県で観察されたセイタカシギの繁殖記録. しろちどり, 59: 3-7.
2. Bamford M., D. Watkins, W. Bancroft, G. Tischler, J. Wahl. 2008. Migratory Shorebirds of the East Asian - Australasian Flyway: Population estimates and internationally important sites. [Online]. Canberra, ACT: Department of the Environment, Water, Heritage and the Arts, Wetlands International-Oceania. Available from: <http://www.environment.gov.au/biodiversity/migratory/publications/shorebirds-east-asia.html>.
3. BirdLife International. 2014. Species factsheet: *Synthliboramphus wumizusume*. Available from: <http://www.birdlife.org> on 07/05/2014.
4. Carter, H. R., Ono, K., Fries, J. N., Hasegawa, H., Ueta, M., Higuchi, H., Moyer, J. T., Chan, L. K. O., Forest, L. N. De, Hasegawa, M., Vliet, G. B. Van. 2002. Status and conservation of the Japanese Murrelet (*Synthliboramphus wumizusume*) in the Izu Islands, Japan. Journal of the Yamashina Institut efor Ornithology, 33: 61-87.
5. 遠藤孝一. 1989. オオタカ保護の現状と問題点. Strix, 8: 233-248.
6. 橋本太郎. 1959. 熊野灘沿岸地方の哺乳類・鳥類. 吉野熊野伊勢志摩両国立地域拡張調査. pp. 37-52. 三重県吉野熊野伊勢志摩国立公園区域拡張促進協議会, 津.
7. 橋本太郎. 1967. 三重県におけるオオワシの記録. 三重生物, 17: 51.
8. 橋本太郎. 1988. 伊勢地方の野鳥について. 三重動物学会会報, 10/11: 22-28.
9. 樋口行雄. 1975. 耳穴島. 特定鳥類等調査報告書, pp. 185-223. 環境庁, 東京.
10. 樋口行雄. 1982. 尾鷲地域の鳥類相. 尾鷲地域野生生物調査報告書. pp. 143-186. 尾鷲地域野生生物調査会・三重県自然科学研究会, 尾鷲・津.
11. 樋口広芳 (編). 2013. 日本のタカ学 生態と保全 . 東京大学出版会, 東京, 348 pp.
12. Higuchi, H., Morishita, E. 1999. Population declines of tropical migratory birds in Japan. Actinia 12: 51-59.
13. 平井正志. 2009. 豊津浦・町屋浦の野鳥. しろちどり, (61): 5-9.
14. 平井正志・橋本富三・西村泉・坂口 守・大西幸枝・中村洋子・橋本祐子・秋田由美子. 2000. 三重県中部の自然海岸におけるシロチドリの繁殖. Strix, 18: 45-53.
15. 堀内 弘. 2014. 堀内弘大いに語る紀伊長島の海と鳥. しろちどり, (79): 1-5.
16. 市川雄二. 1990. 3 鳥類. 四日市市史第1巻資料編 自然, pp. 281-288. 四日市市環境部環境保全課, 四日市.
17. 今井光昌. 2012. セイタカシギ繁殖記録. しろちどり, (73): 1-2.
18. IUCN (the International Union for Conservation of Nature). 2013. IUCN Red List of Threatened Species. Version 2013.2. <www.iucnredlist.org>.
19. 環境庁自然保護局野生生物課. 1996. 猛禽類保護の進め方. 財団法人日本鳥類保護連盟, 東京, 105 pp.
20. 環境庁. 1981. 日本産鳥類の繁殖分布. 大蔵省印刷局, 東京, 554 pp.
21. 倉田 篤. 1971. 紀伊長島の鳥類. 三重県紀伊長島町, 紀伊長島, 54 pp.
22. 倉田 篤・池山雅也. 1963. 鈴鹿山脈の鳥類. 鈴鹿山脈自然科学調査報告書, pp. 65-82. 三重県自然科学研究会, 津.
23. 前澤昭彦. 2004. 第3節鳥類相. 上野市史自然編. pp. 516-537. 上野市, 上野.
24. 守屋年史. 2012. モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査冬期調査報告. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田, 76 pp.
25. 守屋年史. 2013. モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査冬期調査報告. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田, 68 pp.
26. 守屋年史・伊奈達雄. 2014. モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査平成25年度冬期調査報告. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田, 69 pp.
27. 日本イヌワシ研究会・日本自然保護協会 (編). 1994. 秋田県田沢湖町駒ヶ岳山麓イヌワシ調査報告書. 日本自然保護協会報告書第79号. 日本自然保護協会, 東京, 113 pp.
28. 岡 八智子. 2010. 三重のミヤコドリ. しろちどり, (63): 6-7.
29. 大西敏一・五百澤日丸. 2014. 決定版日本の野鳥650. 平凡社, 東京, 788 pp.

30. Qiu Ying Jie. 1999. The Ecological Investigation of Sauder's Gull (*Larus saundersi*). 第8期プロ・ナトゥーラ・ファンダ助成成果報告書. Available from: http://www.nacsj.or.jp/pn/houkoku/h01_08/pdf/h08_no12.pdf
31. 杉浦邦彦. 2001. 第2項鳥類. 紀勢町史自然編. pp. 137-171. 紀勢町, 紀勢.
32. 高橋松人. 1977. 松阪市において観察された鳥類目録. 松阪市史 自然編. pp. 639-647. 松阪市, 松阪.
33. 武田恵世. 1989. 日本列島におけるタカの渡り. *Strix*, 8: 35-123.
34. 武田恵世. 2004. 上野市の希少鳥類. 上野市史自然編: pp. 538-553. 上野市, 上野.
35. 武石全慈. 1987. 福岡県小屋島におけるカンムリウミスズメの大量斃死について. 北九州市立自然史博物館研究報告, 7: 121-131.
36. 寺西敏夫. 1986. 多度町南部丘陵地における脊椎動物相. 養老山脈南部丘陵地(古野地区)自然科学報告書. pp. 15-49. 北勢自然科学研究会. 桑名.
37. 富田靖男. 1994. 第三節脊椎動物門鳥綱. 宮川村史第1巻自然. pp. 89-101. 宮川村, 宮川.
38. 富田靖男. 2003. 第三節鳥綱. 三雲町史第1巻通史編. pp. 76-93. 三雲町, 三雲.
39. 富田靖男・富田 傑. 2001. 第3章 勢和の動物. 勢和村史. pp. 54-175. 勢和村, 勢和.
40. 若林郁夫・中村みつ子. 2004. 三重県におけるミサゴの目撃記録. 三重自然誌, 8/9/10: 29-32.
41. 若林郁夫・中村みつ子・岡 由佳里. 2005. 三重県の海岸に漂着したウミスズメとカンムリウミスズメ. 三重の生き物だより, 27: 2-3.
42. 山下善平・樋口行雄・山本和彦・増井憲一・順川 恒・大迫義彦・真崎 健・吉田浩美. 1982. 大台山系国設鳥獣保護区保護管理計画策定基礎調査報告書. 三重県農林水産部林業事務局, 津, 58 pp.
43. 山崎 亨. 2008. 空と森の王者イヌワシとクマタカ. サンライズ出版, 彦根, 218 pp.
44. 財団法人日本野鳥の会. 2004. 鳥類繁殖分布調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田, 343 pp.
45. 財団法人山階鳥類研究所. 2002. 神宮鳥類生息調査報告書, 神宮司庁営林部, 伊勢, 135 pp.

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD